

324  
659

三和諸議義  
吉祥真雄著



始



324

650

三和讚講義

吉祥真雄著

324-659



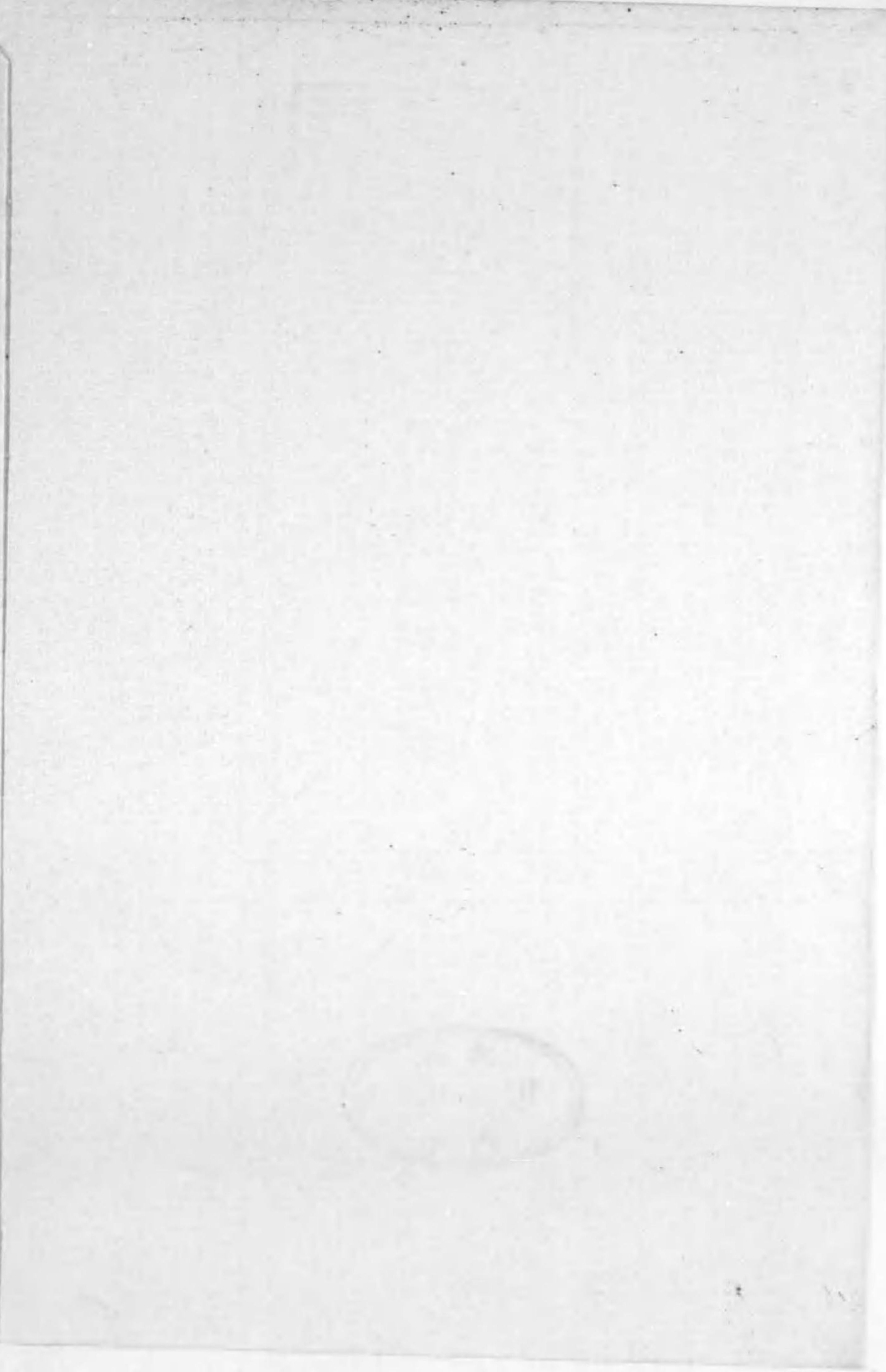
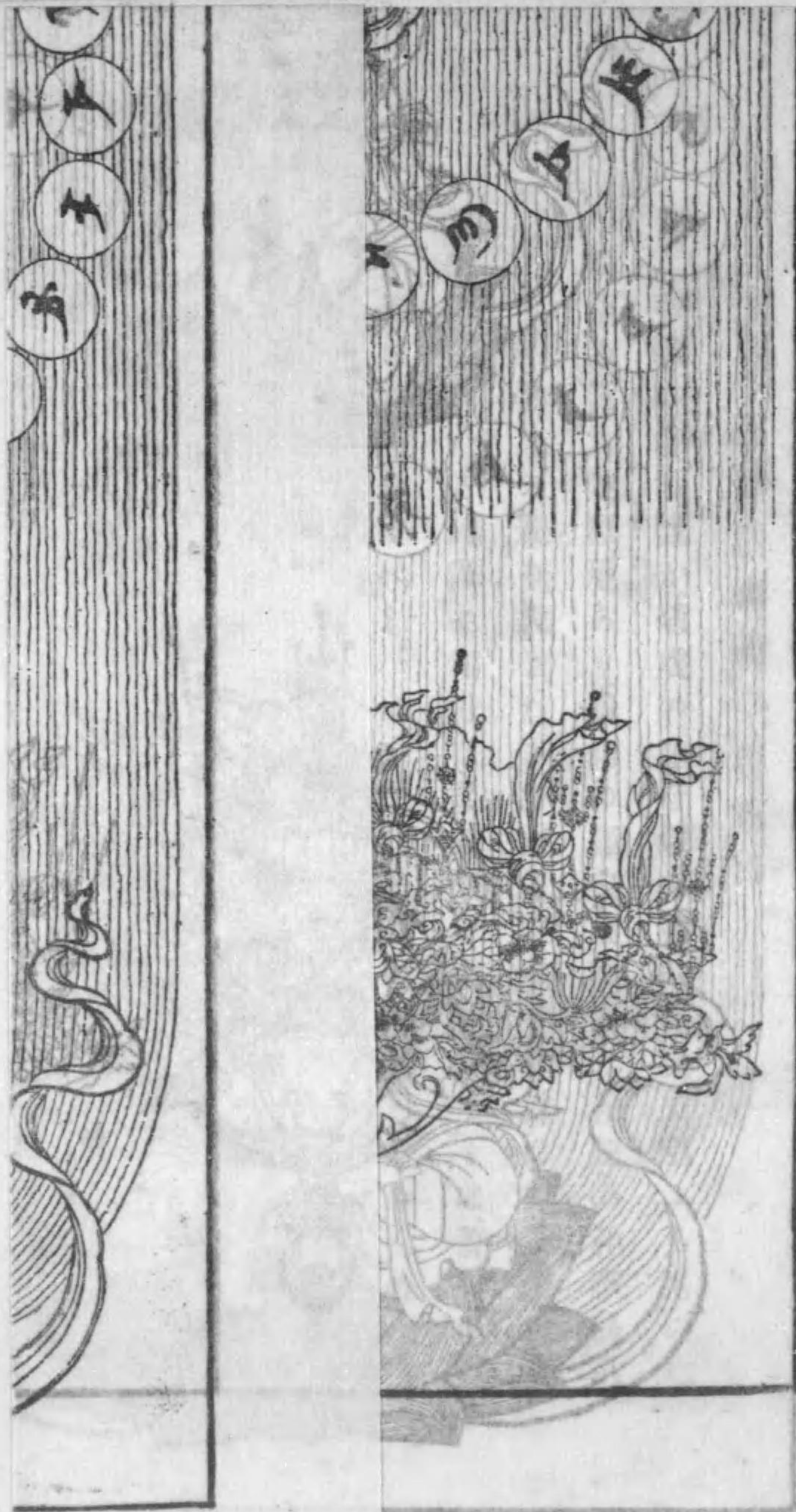
司講 吉祥眞雄著

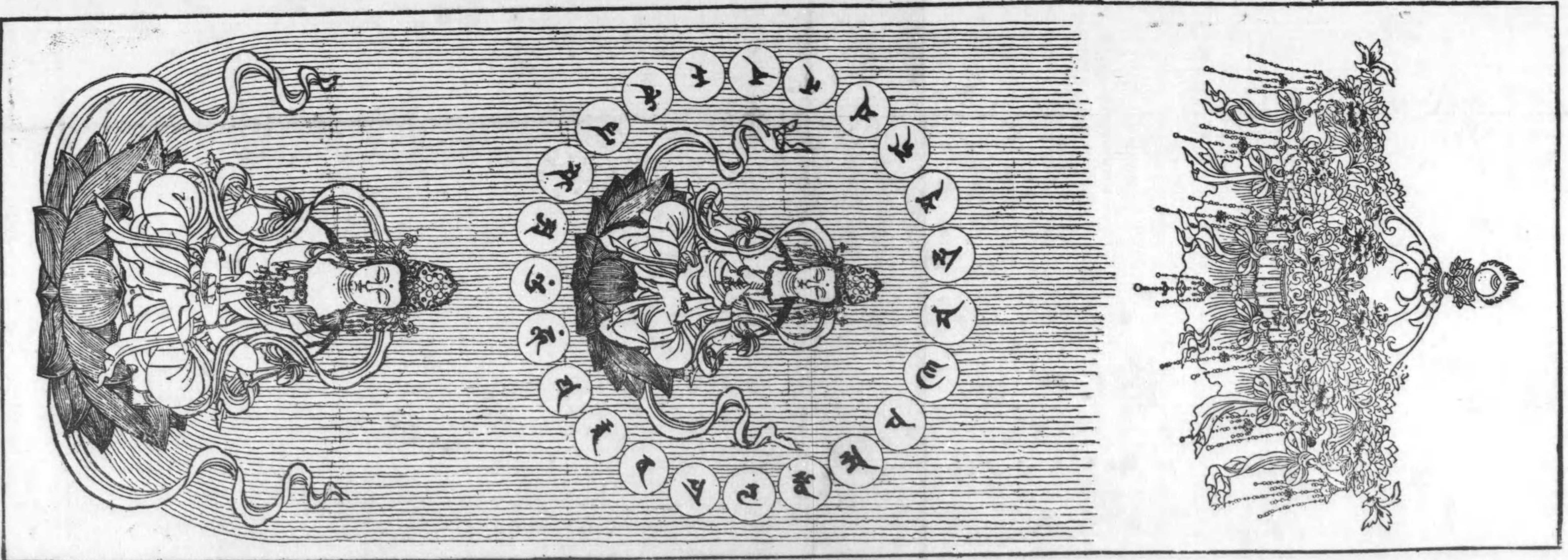
和 讚 講 義



ミ  
ト  
ラ  
會  
藏







0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4



### 三和讃講義の巻首に

我國の佛教徒が敬虔の念を以て佛前に於て唱ふるものに、梵語の眞言陀羅尼あり、漢語の經典論釋あり、和語の和讃詠歌あり。如來の親り説きたまひたる經典や眞言は尊く、後世人師の説きたる論釋や和讃は幾分軽く感ぜらるゝは、蓋し止むを得ざる所なるべし。さもあれ、意義の理解し難きものは信じ難く、文句の領知し易きものは親しみ易きは、また否む可からざる事に屬す。是を以て和讃詠歌教示章の類、道俗を通じて汎く行はるゝに至れり。佛説の經典眞言を唱へずして、人師の作りたる和文を用ふるは、輕重を顛倒せりと謂ふ勿れ。高祖大師は「一佛の名號を稱して無量の重罪を消し、一字の

眞言を讀して無邊の功德を獲」云曰へり。夫れ然り、佛名を稱し、眞言を讀するに、滅罪成善の功德あり、梵漢和語その何れを以てすとも、それは問ふ所にあらざるなり。況や、和語を以てするものは、知解を増し、信仰を進むること、更に大なるをや。三和讃の汎く行はるゝ洵に所以ありと謂ふ可し。若し此の些小なる講義によりて、少分なりとも三和讃の義趣を闡明し、以て解信を増進することを得ば、その功德を以て佛祖の法樂に供し、恩徳の報謝に資せん。是れ本書を作る所以なり。

大正十年三月三日

東寺五層塔下にて 眞雄記

### 三和讃講義 目次

#### 第一編 眞言安心和讃

第一章 はしかき……………一

和讃の意義——安心和讃の作者

第二章 安心の大綱……………三

眞言宗の安心——凡聖不二——歸命の義——大日如來——胎藏曼荼羅——衆生の心地

第三章 一門と普門……………八

普門の大日——一門の諸尊——一門即普門——密嚴國土

第四章 密教に遇へる悦び……………一〇

惠果阿闍梨——遇ひ難き密教——二佛の中間

第五章 三時超過の法門……………一四

正像末の三時——三時を謂はぬ——五濁惡世——上根勝慧——三密加持——四身成佛——現代と密教

第六章 眞言の功力……………二二  
 下根の爲には——眞言とは何ぞ——眞言の功德——長專房と一休——印契の意義と功德——三密具せずとも

第七章 他力の方便……………一五  
 あわれ不具者——不具者の爲にも——乘願房宗源

第八章 光明眞言……………二六  
 光明眞言——清淨蓮華明王——眞言は多含——唵字の三義——呬字の多義

第二編 光明眞言和讃

第九章 本據及び註釋書……………三三  
 一經と二儀軌——主なる註釋

第十章 光明眞言に歸命す……………三七  
 歸命の意趣——光明眞言の名義——灌頂の意義——衆生の爲の灌頂——佛菩薩總係り

第十一章 供養の功德……………四〇  
 唵字は何の義——供養は六波羅蜜——供養は六道を救ふ——成佛するも唵の力

第十二章 不空の大益……………四四  
 不空の徳——佛菩薩の加護——現世利益の意趣

第十三章 除暗遍明……………四七  
 太陽も及ばぬ——我等が大日——誦呪即ち說法

第十四章 生佛不二の大印……………四八  
 印とは何ぞ——不二の大印——大印の功德

第十五章 如意寶珠……………五一  
 寶珠の徳——貪らざるは富——云何が福壽

第十六章 蓮華の三徳……………五四  
 淤泥不染の徳——華果同時の徳——種子不失の徳

第十七章 光明攝取……………五七  
 智慧の光明——攝取せられて

第十八章 凡夫を轉易して……………五九  
 如何に轉易する——凡夫と佛陀——六神通



第十九章 破壊の大力……………六一  
意味深い呼字——呼字の功德  
 第二十章 加持土砂の功力……………六三  
亡者の爲に——土砂を加持する由——五逆四重の者も  
 第二十一章 醍醐の妙教……………六六  
五藏中に最勝——醍醐の妙味  
 第二十二章 眞言の大意……………六八  
光明眞言の和譯——五智如來に配す

第三編 弘法大師和讃

第二十三章 由來及び大師傳……………七一  
大師和讃の由來——大師の傳記  
 第二十四章 出世と立誓……………七四  
大師の十號——遍照金剛——御誕生——屏風が浦——捨身誓願

第二十五章 眞言宗を傳ふ……………七七  
大日經を得て——入唐す——眞言法を傳ふ——御歸朝の後  
 第二十六章 眞言宗の安心……………八〇  
上根も下根も——脚本と舞臺——下根の易行  
 第二十七章 嬉しや葛蔓……………八三  
即身成佛の教——大師の即身成佛——龍華開くまで——その徳は高野山——我等は葛蔓——嵯峨天皇と大師——淳和天皇と大師——高貴の高野詣で  
 第二十八章 甘露の雨……………九〇  
大旱の喜雨——少僧都を辭す——神泉苑——守敏僧都に就て——大師の祈禱  
 第二十九章 四句の偈頌……………九四  
文化の母——金口の眞説——雪山童子——捨身の偈——尊きいろは歌  
 第三十章 假字の便益……………九八  
漢字と羅馬字——佛教といろは歌——最大なる發明——大師の文學——大師の教育

第三十一章 世間の利益……………101

尊き現世利益——御誓願と五種法——八十八ヶ所

第三十二章 出世間の救済……………107

凡夫の有様——生死の海廣し——三地の菩薩——二佛中間の導師

第三十三章 唱名禮……………110

大師遍照とは——報恩謝徳

### 三和讃講義目次畢

### 三和讃講義

司講 吉祥眞雄述

#### 編 眞言安心和讃

#### 第一章 はしがき



和讃の意 先づ和讃の意義を解釋しておく必要がある。讃とは讃歎の義、讃頌の義で、佛菩薩等の尊き本誓功德又は法門教義の深き旨趣功德を稱揚しおほめするのが讃である。稱揚し又おほめすること云ふても辯俊なる者が心にもない空世辭を言ふて、先方の歡心を買ひ以て自己の利益を計るなどは異なり、尊き功德を承はりては心の底より嬉しき忝さが湧き出でて自然と詞にあらはれるのである。他の善を見て喜ぶは自己もまたその善に倣ふ基である如く、佛菩薩等の功德を稱揚するは、

眞言安心和讃

安心和讃  
の作者

やがて自己も佛菩薩等に等しからんことを欣ぶのであつて、讚に廣大なる功德のある所以である。だから『法華經』第一には「若し歡喜の心を以て歌唄して佛徳を頌する者あれば皆以て佛道を成ず」と説き、『金輪時處儀軌』には「此の秘密瑜伽歌詠の讚を以て如來を歎揚するに由るが故に成佛なほ難からず況んや諸の成就を求むるをや」と説かれてある。斯様なわけで讚は印度に古くからあつたのである。その印度にあるものは云ふまでもなく梵語であつて之を梵讚と云ひ、梵讚が漢語に翻譯せられたもの又は漢語で新に作られたものは之を漢讚と云ひ、和語即ち日本語の讚を和讚と云ふのである。但し和讚の和は唱和の義で大衆聲を合し曲譜を合して唱へるから和讚と名けるのだと解釋することもある。

次に『安心和讃』の作者に就て一言費しておかねばならぬ。『在家勤行法則』に此の『安心和讃』と『光明真言和讃』と『弘法大師和讃』とを載せてあるが、『大師和讃』は尾道の佐伯慈明和尚の作初めの二和讃は東寺長者三條西乘禪教正の作である。然し是れは乘禪教正の創作ではなく、ズツト古く鎌倉時代に大和の西大寺の興正菩薩のお作りになつたものがあつて、明治十一年高野山に於ける

布教會議の際此の和讃を汎く道俗の間に流布したのであるが、文句が長過ぎるので短く改訂したらよからうと云ふことになり、佐伯慈明和尚に之を托したのであるが、和尚は間もなく遷化せられたから、伊豫の服部鑲海僧正と神戸の柴田智秀僧正とが改訂して、東寺長者乘禪教正の名を以て發布したものである。

## 第二章 安心の大綱

歸命頂禮大日尊

八葉四重の圓壇は

一切如來の秘要にて

衆生心地の曼荼なり

真言宗の  
安心

真言宗旨の安心は、一言に云へば凡聖不二と云ふの外はない。凡聖不二とは迷の世界にある凡夫たる我等が悟の世界の聖者たる佛と隔はないと云ふのである。古歌に「雲はれて後の光と思ふなよ、もとより空にありあけの月」と云ふのがあつて居る時は暗い雲が晴れると明るくなる、けれども曇つて居る時には光がなくて雲が晴れたからはじめて光ができたのではない、晴曇に拘はらず月の光は

常にあるのである。それと同じく迷の凡夫には智慧の光がなく悟つて後にはじめて智慧の光があらはれるけれども、佛性と名ける月は佛にあるばかりでなく、我等凡夫にも常に備はつて居るのである。弘法大師が『般若心経秘鍵』に「佛法は遙かに非ず、心中にして即ち近し、真如は外に非ず、身を弃て、何くにか求めん」と仰せられたのもこの意である。斯の如く凡夫にも佛と隔てなき佛性があるから凡聖不二である。所が一切の衆生に佛性のあることは、獨り真言宗に限るわけではなく、他の諸宗にも謂ふことであるが、さて然らばその佛性を磨き出す所の修行法は如何と尋ねると大抵は凡夫の身で佛の作業は、とても出来ない云ふのが普通である。たとひ凡聖不二であつても、凡夫が現在の惜しい欲しいのまゝで、直ちに如来ではないのだから所謂曇つて居て月の光は見えないのだから、その光をあらはす方法がまた何人にもできるのでなければ、凡聖不二が何にもならぬ。然るに真言宗の凡聖不二は、常に凡夫が佛性を備へて居ると云ふばかりでなく、凡夫の此の身で直ちに佛の作業を行ふことができるから、父母より生れたる肉身のまゝで佛になれるのである。そのことは後に至りて説明せられるが、今此の四句は總

凡聖不二

て凡聖不二云ふことを示されたのである。

歸命の義

次に文句を解釋すれば、歸命の命は身命の義又は教命の義で、歸命と云ふは我が大切なる身命までも捧げて佛にお任せする而して佛の御教の通り御命令の通り遵奉致しませうと云ふ意である。頂禮とは尊敬する佛の御足に我が頂をつけて禮するので最も鄭重なる敬禮である。斯く身命を捧げ教命を遵奉して鄭重なる敬禮をするのは何尊にするのかと云へば、大日如来に對してするのである。大日如来を歸命するわけは諸佛菩薩の數多けれども、皆悉く大日如来の御徳を分つて主つてござるのであつて、大日如来が諸佛菩薩の總主にまします故である。

大日如来

此の如来を大日と名ける譯を一言せねばならぬ。梵語に毗盧遮那と云ふのを除暗遍明と譯する即ち日の異名である。日は能く暗を除いて遍く照すけれども、晝夜とか陰日向の別があるが、如来の智慧の光は一切の時一切の處に行き亘りて照さぬ所はない。また日は動物植物に熱を與へて、それ等を生存せしめ成長せしめる、それと同じく如来の功德も能く無量の衆生に種々の善根を開發せしめ、世間出世間の尊き事業をも成就せしめる。また日は晴曇に拘はらず、その光に生滅は

ない、如來の光もその如く無明煩惱の雲に覆はれても、全く迷を離れたる状態にありても、生滅増減はない。斯の如く太陽に除暗遍明と能成衆務と光無生滅との三義があつて、一分如來の德に似て居る點があるから、日に喩へたのである。けれども如來の德は日に比ぶれば遙かに廣大であるから、摩訶を加へて摩訶毗盧遮那即ち大日と名けたのである。因みに云ふ、世俗に住々天道大日如來と稱へて太陽を拜んで居る者があるが、太陽になぞらへて大日如來の功德を念ずるのならばよろしいが、太陽のみを崇拜するのであつたならば餘り感心できない。

胎藏曼荼羅

八葉四重の圓壇とは胎藏曼荼羅のことである。胎藏曼荼羅は中央に中臺八葉院と稱して、八葉蓮華の蓮臺に大日如來と四方の花瓣に寶幢如來開敷華王如來無量壽如來天鼓雷音如來四隅に普賢菩薩文殊菩薩觀世音菩薩彌勒菩薩の四佛四菩薩がござる、而してその外側に觀音院金剛手院釋迦院虛空藏院などが四重に圍んである、だから八葉四重と云ふのである。圓壇とは曼荼羅のことである。曼荼羅は梵語であつて壇と譯し又は輪圓具足と譯する、それで圓壇と云うたのである。尙ほ此の外に聚集とか無比無過上味とか發生とか譯する。如來の悟の境界の精

衆生の心

要心髓は此の上もなき妙味であるから無比無過上味と云ひ、萬德の集まりて圓滿に具足して居るから聚集又は輪圓具足と云ひ、此の悟の境界から無量無邊の三密を發生するから發生と云ふのである。斯の如く如來の悟境の精要を圖書に顯したものが我々の平生拜する胎藏曼荼羅である。故に八葉四重の圓壇は一切如來の秘要にてと云はれたのである。胎藏曼荼羅が一切如來の秘要であるのみならず、金剛界曼荼羅も同じく一切如來の秘要である。元來佛の悟境に二つある筈はないから曼荼羅は唯一つである、而も佛の智慧の方面から見ると之を金剛界曼荼羅と云ひ佛の智慧が慈悲の作用をなす方面から見ると胎藏曼荼羅と云ふのである。衆生心地とは衆生の心である。地の中に金銀銅鐵の礦石やその他種々のものを含んで居る如く、心の中には佛性を備へて種々の功德を含んで居る又地から草木等が生ずる如く、心から種々の善根を發生するから心を地に喩へて心地と云ふのである。上に述べたやうな曼荼羅は我等の世界を離れて佛だけのことを云ふて居るのではない、金胎兩部の曼荼羅は衆生の心内に輪圓具足して居る功德の狀態である、即ち凡聖不二であると云ふのである。

第三章 一門と普門

十方淨土の諸聖衆は 大日普門の萬徳を

開きて示し、尊なれば 密嚴國土の外ならず

普門の大

淨土眞宗には必ず阿彌陀佛を本尊とし、禪宗には必ず釋迦如來を奉安するが、眞言宗では數多の佛菩薩等を崇拜し、同じ眞言宗の寺院でもその本尊が一定してない。藥師如來とか觀世音菩薩とか、文殊菩薩地藏菩薩不動明王等種々である。けれどもこれは喩へて云へば、吳服屋八百屋金物屋等が軒を並べて各自に商賣の競争をして居るやうなわけではない。前にも云へる如く、大日如來が一切の佛菩薩等の總主であつて、大日如來が一切の萬徳を具へてござる、一切の萬徳を具へてござるから、普く一切の法門によりて、普く一切の衆生の樂欲に應じて之を化益するのである。依つて大日如來の徳を普門と云ふのである。普門の大日如來が衆生を化益するにあたりて、衆生の樂欲に應じて種々無量の佛菩薩等の身を示現する。釋迦藥師阿彌陀觀世音地藏不動等はみなそれである。此れ等の諸尊は大日如來の一方

一門の諸

一門即普

面の功德法門を主るお方であるから、之を一門と云ふのである。兩部曼荼羅に大日如來を中心として、その周圍に諸佛菩薩が多くましますのは、つまり此の一門普門の意を表すのである。所が泥土を以て土偶を作れば、小兒や犬や鶏や桃や種々に形は異なつて居るが、何れを壊しても本の土になる如く、一門の諸尊何れを信仰しても、結局は大日如來の御本意に契ひ、その功德智慧を悟ることになるのである。「發菩提心論」に「瑜伽の中の諸菩薩の身に成らんと願ふをも、亦發菩提心と名く、所以は何にかなれば、次をなせる諸尊みな大毗盧遮那佛身に同じ」と云へるは、即ち此の意を明すのである。是の如く一門がそのまゝ普門の徳にかなふから、之を一門即普門と云ふのである。

和讃の文の意味を云へば、四方四隅上下の十方に淨土があつて、それらの淨土に佛菩薩がござるが、その諸佛菩薩は普門大日の功德の一方面一面を開いて示した一門の尊であるから、十方にある所の一門の淨土も悉く大日如來の淨土たる密嚴國土の外はない。それは恰も地方長官の支配に屬する三府四十三縣等は分れて居るけれども、結局天皇陛下の領したまふ大日本帝國の外ならぬが如くであ

眞言安心和讃

る。されば阿彌陀如來を念じて西方極樂に往生せんことを願ふ者も、彌勒菩薩を念じて都率内院に上生せんことを願ふ者も、その願に隨ひて、その淨土に生れることが出来るが、その淨土に入り終れば、それがそのまゝ大日如來の淨土であるから、何れの佛菩薩なりとも各人の信仰する尊を念すればよいのである。大日如來の淨土を密嚴國土と名ける所以は、大日如來の身語意はその體性業用が微妙不可思議であつて、凡夫の到底測り知ることのできないものであるから、之を三秘密と云ひ、その三秘密の無量の功德を以て莊嚴せられたる淨土であるから、之を密嚴國土と名けるのである。

#### 第四章 密教に遇へる悦び

青龍阿闍梨の教誡に 菩提を得るは易けれど  
眞言秘密に遇ふことの 得難きなりと演へたまふ  
二佛出世の中間に 果報つたなく生るれど

いかなる宿世の種因にて 解脱の時を得たりけん

惠果阿闍梨

此の八句は惠果阿闍梨のお詞に基づいて、眞言密教に遇ふことは容易でない、今我れ等が眞言密教に遇ふことを得たるは、最も歡ぶ可きことである、所以を述べたのである。「青龍阿闍梨」とは、大唐長安城青龍寺の惠果阿闍梨を謂ふので、此の方方は弘法大師に眞言秘密の法門をお授けになつた師である。こゝで好き機會であるから、惠果阿闍梨の御事蹟をザット述べておかう。

惠果阿闍梨は俗姓は馬氏京兆の人である。まだ幼少の時に大照禪師と云ふ、方方の弟子になり、禪師のお供をして大興善寺の不空三藏にお目にかゝつた。不空三藏は眞言宗第六代の祖師である。その時に三藏は一目見て此の兒童が常人でないことを見込んで、大層お褒めになり、其の後は親が子を育てるが如く親切に眞言宗のお經を教へたり、灌頂を授けたりして、熱心に教育なされた。年僅かに十五歳の時、東宮後に代宗皇帝の召に應じて、其の間に答へ深く御感に預かつたことがある。年長じて後、不空三藏から金胎兩部の大法を授けられて、遂に第七代の祖師となられた。代宗、德宗、順宗の三帝に國師として宮中に出入し、眞言の法を弘めて

眞言安心和讃

朝野士民の歸依を受けたことが四十餘年間であつた。我が高祖弘法大師が入唐  
 なされて青龍寺に御訪問なされた時此の尊き眞言の法が日本にまで傳へる機會  
 に遇うたことを喜ばれて早速道場を莊嚴して、秘密の法を殘らず大師にお授けな  
 された。斯くして此の法を支那で傳へるには義明供奉あり、日本に弘めるには弘  
 法大師あり、其の他訶陵の辨弘、新羅の惠日、劍南の惟上、河北の義圓等、立派な法の嗣  
 に付嘱し終つて、永貞元年日本の延暦二十四年十二月十五日御齡六十歳で入寂な  
 されたのである。阿闍梨とは梵語であつて翻譯して軌範師と云ふのである。善く  
 佛法に通達して能く人の師となり軌範となる可き人を云ふのである。  
 『性靈集』第二卷に惠果阿闍梨が平素門弟をお諭しなされたお語が出てある。  
 「人の貴きは國王に過ぎず、法の最なるは密藏に如かず、牛羊に策うつて道に趣く  
 ときは久しくして始めて到り、神通に駕して以て跋涉するときは勞せずして至る、  
 諸乗と密藏と豈に同日にして論することを得んや。胃地の得難きにはあらず、此  
 の法に遇ふことの易からざるなり」と。胃地即ち菩提は梵語で覺と翻譯する即ち  
 覺を開いて成佛することである。眞言の教は如來の身語意の三秘密を説かれた

教であるから眞言秘密と云ひ密藏とか密教とか名けるのである。扱て惠果阿闍  
 梨のお諭しの意味は覺を開き成佛するは強ち困難なることではない、眞言秘密の  
 法門に遇うたならば必ず成佛はできるのだ所がその眞言秘密の法門に遇ふこと  
 が容易ならぬのだと云ふのである。

我等は果報拙くして釋迦如來には三千年遅れ當來下生の彌勒佛には五十六億  
 七千萬年先だちその中間に生れたから親しく佛の教化を蒙ることのできないの  
 は残念であるけれども前世に如何なる善根の種子を植ゑ、功德の因縁を結んでお  
 いたのであらうか、尊き眞言密教に遇ふことができた。覺を開くのはむつかしい  
 ことでない、眞言密教に遇へば必ず成佛することはできると承る、されば密教に遇  
 ふことのできた我等は既に迷の世界を脱れ出て成佛する時が來たのである、何と  
 ありがたいことよと云ふのが、「二佛出世の中間に」等の四句である。宿世の因  
 縁がなければ此の眞言密教に遇ふことはできないのである、そのことは、『大日經』  
 『寶樓閣經』などに説かれてある。



第五章 三時超過の法門

五濁惡世の此の頃も 上根勝慧の者ありて

如説に修行する時は 正像末のへだてなく

一念一時一生に 三密加持の不思議にて

無盡の功德圓滿し 即身成佛せらるなり

正像末の  
三時を謂

眞言密教以外の佛教即ち顯教では正像末の三時と云ふことを立てる。三時の分ち方には異説があるが大體釋迦如來の滅後一千年間を正法の世とし次の一千年間を像法の世とし次の一萬年間を末法の世とし其から後には佛法は全く滅びてしまつてその名目を聞くこともできぬと云ふのである。而して正法の世は正しく佛法の行はれる時代で佛法を聞いて之を理解しその教の如く修行し、そうして立派に證果を得る者もある。像法は正法に似たる時代であつて、理解し修行する者はあるけれども法の感化力が鈍つたからでもあらうし行者の熱烈さや智力

三時を謂  
はぬ

精力が減じたからでもあらう證果を得る者が無い。末法には理解する者はあるけれどもその理解が不徹底なる故に修行も證果もないと斯様に謂ふのが通常謂ふ所の正像末の三時である。所が眞言宗の教では三時を立てない機根が勝れ智慧の勝れた者があつて教の如く修行したならば何れの時代に於ても即身成佛することのできるのである。斯く云へば機根が勝れ智慧の勝れた者があつて教の如く修行したならばと云ふけれども像法末法の時代には左様の人がない筈ではないか眞言の教に限りて左様の人がある筈はない然らば眞言密教にも正像末の三時がある筈だと疑ふ者があるかも知れぬ然しそれは眞言密教の何たるかを充分知らないから起る疑である。正法千年像法千年末法萬年と云ふのは釋迦如來の教法に就て云ふのである。所が眞言密教は釋迦如來の教ではなくして大日如來の法門である。大日如來は上にも述べたる通り太陽の常住不變に光を放つが如く常住不變の如來である。常住不變で入滅せられない如來の法門に滅後千年とか一萬年とかの期限のある筈はない教法が不變であれば従つて行者の機根智慧も何れの時代も變りはない顯教の如く正法の世には勝れた人が多く末法に

眞言安心和讃

は修行する力のない者ばかりだなど云ふ理はないこと當然である。弘法大師が『法華經開題』及び『梵網經開題』に「人法法爾なり興廢何れの時ぞ機根絶絶たり正像何ぞ別たん」と云はれてゐるのは全く此の意である。

五濁惡世

次に文句に就て解釋を加へておかう。五濁惡世とは劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁を云ふ。劫は時世を云ふので時世に善惡清濁はないが如何に上等の器であつても穢物を下るれば不淨の器となるが如く次の四濁の盛なる時世を劫濁と云ふのである。『俱舍論』の説によれば世界の成り立つた最初には人の壽命が非常に長いそれが後に減じて八萬歳となりそれから後は百年毎に一歳を減じて終には十歳に至りその後は増してまた八萬歳に復りまた減ずると云ふ風に増減する而して二萬歳以下の時代を劫濁とするのである。見濁とは見解の正しくないことである因果の關係のないものがあるやうに思ふたり道理に外れたことを道理に契うて居るやうに思ふたり自己の悪いことは善いことのように思ふたり他人の善いことは悪いことのように難癖をつけたりは是れ等がすべて不正なる見解である佛敎で十根本の煩惱を立てる中の身見邊見邪見見取見戒禁取見の五見が即ち

見濁であつて世に所謂邪見がその大部分である。煩惱濁は衆生の迷の心から起す所の種々の心のはたらきである十根本の煩惱の中の貪瞋癡慢疑の五種が即ち煩惱濁である。衆生濁とは見濁や煩惱濁によりて種々の善からぬ行をする善からぬ行をするからその果報として智慧や根氣や體格まで益々劣等なるものとなる是れが衆生濁である。また壽命も大昔の如き幾萬歳の長壽をたもつことができずまた天死する者もある是れが命濁である。斯かる五濁の世が即ち惡世である。

上根勝慧

上根勝慧とは信仰精力意志等の勝れたるを上根と云ひ智慧の勝れたるを勝慧と云ふ根とは佛道修行の根本と云ふことでそれに役立つ所の信仰や勤勉や強き意志等を云ふのであつて之に役立たない根氣や智慧は何にもならないのである。

三密加持

三密加持とは佛の身語意のはたらきは凡夫の思ひ議ることのできない不思議の徳があるから之を三密と云ふのである。佛の身語意のはたらきと云ふただけでは分り難いが手近く云へば印契は身密である合掌や禮拜もやはり印契であつて即ち身密である。光明眞言とか大日如來の五字の眞言とか其他一切の眞言は語

密である。眞言の意味や功德や佛菩薩の本誓等は意密である。若し我れ等が此れ等の印契を結び眞言を唱へ本誓を觀念すればそれがやはり三密である。而も凡夫の修する三密も佛の三密と決して差異はないのである。加持は往來渉入の義と釋して互に往き渉りて相離れない關係を有することである。油と水を混合すれば互に他を排斥して決して渉入し和合すると云ふことはない。然るに水と水を一つにすれば全く混合して是れだけが井戸の水であれだけが河の水と云ふ風に、一つの器の中で別々に分れてあると云ふことはない。是れは何故であるか。油と水と油と水とは質を異にするから混ざり合ふことができないけれども、水と水とは質が同じから相混ざりて分つことのできないやうになるのである。恰もその如く衆生の三密が如來の三密と全く同等のものであるから、我等の如き凡夫が三密の行を修する時は、如來の三密に加持せられて、佛と同じ功德を成就することができるのである。

即身成佛

即身成佛とは此の身のまゝ佛になることである。即身成佛は唯だ眞言密教に限ることであつて、顯教諸宗には決して云はないのである。「金剛頂發菩提心論」

には「たゞ眞言法の中にのみ即身成佛するが故に、是に三摩地法を説く諸教の中に於ては、關けて書さず」と述べ、「金剛頂一字頂輪王儀軌」には「此の三昧を修する者は、現に佛菩提を證す」と説かれてある。顯教では即身成佛など云ふことは夢にも知らないから、弘法大師が眞言密教を支那からお傳へになつた當時之を非難する者が多かつた。その時に大師は「大日經」「金剛頂經」「發菩提心論」等に依りて「即身成佛義」をお作りになり、眞言密教に依りて修行すれば、即身成佛することができるのであることを主張なされた。即身成佛することのできる所以を今こゝで委しく述べることはできないが、概略を云へば、顯教諸宗には佛の三密を説かぬ從つて、佛道修行者が佛の三密を修することがない、その修行法はみな行者自身の法であつて、佛の作業でないから、佛の作業と行者の作業とが恰も油と水と混合したやうな關係であつて、密教の三密加持によりて、行者が直ちに佛の作業をなすが如きとは大變な相異である。是れ即身成佛のできない所以である。密教では行者が佛の三密を修するのであるから、三密加持の力によりて、即身成佛することができるのである。

つまり此の八句の意味は顯教では五濁惡世には修行が困難であり殊に正法の世は過ぎて現今の如く末法の時ともなれば到底満足に修行する程の者はなく覺を開く者などはないと云ふけれども密教の教に従へば現今の如き時代にありても信仰や智慧の勝れた者がないとは限らぬ上根上智の者があつて教の通り満足に修行するならば釋迦如如の滅後千年でも二千年でも更に其れより後であらうとも正像末などには關係なく三密加持の不思議力によりて極めて早い者は一念の間或は一時の間遅きは一生の間に如來の功德と同じき無量の功德を完全に成就して此の身のまゝ覺を開いて佛に成れると云ふのである。

第六章 眞言の功力

- 下根劣慧のごもがらも 決定諦信致しなば
- 一度神呪を唱ふるも 無明を除くご説きたまふ
- 一密怠ることなくば 増上縁の力にて
- 三密具足の時いたり 終には佛果を證すべし

上に述べたる如く上根勝慧で法の如くに修行して即身成佛のできる者はよろしいが信仰や意志や精力や智慧の劣等なる所謂下根劣慧の輩は、逆も即身成佛のできる見込はない然しそれでも此の尊き眞言の法門によりて御利益を受けることができるのである。それに就て眞言及び印契のことを今一往解説しておかう。

眞言は梵語に漫怛羅と云ふ眞言密語呪など、譯する。佛菩薩等の本誓智慧功德は純粹に眞實であつて少しも虚偽を雜へない、また佛菩薩等の名號は人間の熊吉や八助の如き假に名けたものではなく、その本誓智慧功德等を表す所の眞實の名號である。所で漫怛羅は佛の本誓功德や名號を簡單なる語にまごめたものであるから眞實の語である故に之を眞言と名けるのである。また斯の如く簡單なる語に本誓功德を收めてあるので凡夫の測り知ることのできない不思議の功力を有せる語であるから之を密語と名ける。呪禁の詞は簡單で而も不思議の効驗があるが眞言が恰もその如くであるから呪とも名け神は不思議の義で呪に不思議の功力があるから神呪とも名けるのである。又此の眞言を唱ふる功力によりて智慧が明かになるから眞言を明とも名けるのである。眞言の功德に就ては諸

經軌に多く説かれてあるが、その一二を擧ぐれば、『六波羅蜜經』第一には「若し諸の衆生の顯教の經律論や般若を修行することのできない者をも成佛せしめ、又は四重禁戒を犯し、五逆罪を造り、正法を謗る等の種々の重罪を造つた衆生も、その罪を滅して速かに解脱すること得させるために、佛が眞言神呪を説かれてあるのだ」と云ひ、『不空罽索神變眞言經』第一には「衆生が諸の惡業を造りて長い間地獄の苦を受くべき者は、諸佛菩薩等の力を以てしても、如何ともすることのできないのであるが、大日如來は眞言をお説き下されてあるから、此の眞言を誦することによりて、十惡五逆等の一切の重罪をも滅すことができる」と説き、『陀羅尼集經』第三には念佛と眞言とを比較して、「眞言を誦する功德力は日月の光の如く念佛の功德は夜燈の光に同じ、其の比を得ず」と説かれてある。弘法大師が御歳二十二歳の時、顯教の法門に慊らないで、最極無上の法門を得んことを祈請せられたのも斯かる尊き法門を得んがためであつた。

一長專房と  
一休

眞言は諸尊の本誓功德を簡單なる語で表すのであるが、之を身振りや手指で表す動作が印契である。眞言を唱へることは、顯教に於て經典を讀誦し、佛名を稱す

印契の意  
義と功德

るのと同じて居るから、顯教の人も之をさほご怪まないけれども、印契を結ぶことは顯教に全くないことだから、その意味や功德に就て疑惑を起し易い。むかし高野山の長專房忠義僧都が壇上で印を結び眞言を誦じて修法して居るのを、彼の有名なる一休禪師が見て、指を屈めたり交へたりして印を結んだから、こて、それが何の益になるものかと、非難した。忠義僧都は之を聞いて、一休が立ち去らんとして、歩後から手を拍つた。一休は何事ならんと立留まりて、顧みたら僧都が手を舉げて、魔くから、一休は先刻の非難に對する答辯するのだらうと立戻つた。すると僧都が「我れ汝を呼ばざるに手を拍てば止まりて、顧みれば返り來るは何ぞや、手指を以てする動作に深意なからんや」と云はれたので、流石の一休禪師もグツト詰まつたと云ふ話がある。

印契は印可決定の義と解して、佛は印を結んでその本誓を表して、その本誓に違はぬことを約し、行者はその印を結んで、諸佛の本誓と一致することが決定するのである。だから僅かに十本の指を屈めたり伸ばしたりするだけのやうでも、それで佛の本誓なり功德なり無量の意義を顯すことができるのである。従つて『慈氏

菩薩略修愈誡法」には「印契を結べば行者の身がそのまゝ本尊の身となるので、凡夫には見わなないけれども鬼神などは本尊の真身と見て畏敬し、菩薩明王等はこれ

がために親しみ助けて求願する所を速かに成就せしめる」と説かれてある。世間に於て道徳を説くに言行一致すべしことを喧しく云ふけれども、言行一致するともその精神の伴はないのは是れは偽善であつて決して眞實の道徳ではない。今眞言密教にて手に印契を作し口に眞言を誦じ更に心には佛の本誓功徳を念する是れを三密具足と云ふのである。

三密具足

次に文に就て解釋すれば前に述べたる上根勝慧の者に反して下根劣慧の者は如説に修行することできず従つて即身成佛することはできないけれども此の眞言の法門の尊きことを堅く信じて心を動かさず決定するならば眞言を僅かに一度唱へただけでも無明煩惱が除かれると説かれてある。何に説かれてあるか云へば弘法大師が經論の意味を取りて、『性靈集』第六卷に「三妄は一禮の題に蕩げ五智は一誦の吻に集る」と述べ、『般若心經秘鍵』に「眞言は不思議なり觀誦すれば無明除こる」と仰せられてある。無明とは眞實の智慧の光明のないと

云ふ意味で所謂煩惱迷妄のことである。斯の如く不思議の功徳があるのだから三密を揃へて完全に修することのできない者も最も容易き語密の眞言だけなりと怠らず勤めて居ればそれが増上縁即ち極めて殊勝なる力を有せる縁となる、その増上縁の力によりて三密具足して完全に修することのできるやうになり、終には成佛することができるのである。

### 第七章 他力の方便

過去に造りし報にて  
生れて法門きくことも  
諸佛の慈悲にも漏れぬべし  
他力の方便勝れたる

盲聾瘖瘂の輩に  
唱ふることもならぬ身は  
斯かる衆生を救ふには  
眞言陀羅尼に如くはなし

手に印契を作し口に眞言を誦じ心に佛の本誓功徳を念じ三密具足して即身成佛する程の上根上智でなくとも、せめてお眞言を唱へることのできるならば下根

具者  
あわれ不

眞言安心和讃

劣慧ながらに尊き果報を受けることができる。然るに茲に一層厄介な者がある。不具者の中にも上根勝慧の者が無いとは限るまいけれども下根劣慧で而も六根不具足の者などは如何なるか。佛教には因果應報善因善果惡因惡果の理を説き、「過去の因を知らんと欲せば現在の果を見よ、未來の果を知らんと欲せば現在の因を見よ」と云はれてある程であるから地獄餓鬼畜生修羅人天の果報より、目前の貴賤禍福に至るまで悉く自業自得で過去世の業因に由るものと見ねばならぬ。されば盲聾瘖瘂の如きも過去世に造れる惡業に報ひて、今世に不自由なる果報を得たのである。此れ等の人々は尊像を拜することができず、法門の尊き趣を聞くことができず、名號や眞言を唱へることができない。曼荼羅の尊像を拜見することや、法門の旨趣を聞くことは、佛法に結縁し信仰を發すに重要な機會である。眞言を唱へることは重大なる功德である。然るに盲聾瘖瘂の輩は結縁の機會が少く諸佛の慈悲を蒙るに都會の悪いわけである。

不具者の爲にも

若し拜見せねばならぬ、聞いて信せねばならぬ、信じて唱へねばならぬと云ふのであれば右に述べたる如く、不具者は諸佛の慈悲にも漏れる筈であるが眞言密教

には斯かる薄福の衆生までも救はれる方便がある。それは本人は信仰があらうとも或はなからうとも本人は知つて居らうとも或は知らずとも他の人が眞言を誦じて加持し廻向すれば現世にありても死後にありてもその功德を受けることができる。云ふのである。それは『佛頂尊勝陀羅尼經』『寶篋印陀羅尼經』『不空罽索光明眞言經』等によれば眞言陀羅尼を藏めたる塔又は眞言を誦持する人を吹いた風が他の衆生の身に觸れたならばその衆生は利益を蒙ることができるとか諸の惡業を造り何等の功德をも積まない者が死後に地獄の苦を受けねばならないけれどもその子孫乃至他人が眞言を唱へて廻向すればその功德によりて惡趣の苦を脱れて成佛する等と説かれてある。是れが即ち眞言他方の方便であつて盲聾瘖瘂の輩は聞くことも信ずることも唱へることもできないかも知れぬが、他の者が信じて唱へて廻向するならばその功德を受けることができる。加之現今では盲啞教育の方法さへあるのだからその教育法によりて教へて信仰せしめたとび一遍なりとも唱へさせたならば眞言不思議の功德力によりて殊勝の果報を受けられるに相違ない況や百遍千遍數十萬數百萬遍唱へるならばその功德は

思ひ議ることばできぬ。

乘願房宗

死者の爲に廻向して廣大なる功德あることに就ては、竹谷の乘願房宗源法師の話が『沙石集』並に『徒然草』に出て居る。乘願房は淨土宗の大徳であるが、ある時後深草天皇の後東二條院より亡者の追善には何事が勝れたる利益あるかを尋ねられたその時乘願房は光明眞言寶篋印陀羅尼が最も勝れたる旨答へた後に弟子等が何故念佛が勝れたる由お答へせざりしかと恠しみ問うた所我宗であるから左様云ひたいのであるが稱名念佛を追善に修して利益のあることは經説を見ぬから其の本據を尋ねられた時に返答に困る依つて本經の確かなるに就て此の眞言陀羅尼を申しあげたのだと云うたことである。

第八章 光明眞言

中にも光明眞言は 諸佛菩薩の總呪にて  
一字に千理を含む故 無邊の功德備はれり  
信じて唱ふる我々は 口稱の功力を因こして

往生淨土の一筋に

安心決定致すべし

光明眞言

上に述べたる如く眞言は何れも尊き功德があるが中にも光明眞言は一切諸佛菩薩の眞言であるから一切諸佛菩薩の備へてござる功德智慧がこの二十三字に含まれてあるわけで一層尊いのである。何故に光明眞言が諸佛菩薩總ての眞言であるかと云ふに此の眞言の本據たる『不空罽索神變眞言經』に依れば十方一切刹土の三世一切如来と云へば一切の諸佛菩薩である一切の諸佛菩薩が一時に同一の威儀に住して説かれたのであるから諸佛菩薩總ての眞言である。清淨蓮華明王の頂を摩でるは此の明王を哀愍し護念する意である世間に於ても小兒を可愛可愛するのに頭頂をなでる今も全くそれと同じである。所で此の哀愍護念せられた明王は決して一人の明王ではなく我等一切衆生の總代である否總代と云ふよりも實は明王が即ち我等衆生である。それは何故と云ふに我等一切衆生は如来と少しもかはらない佛性を心の奥深くもつて居る此の佛性は如何なる惡業煩惱に覆は

清淨蓮華明王

眞言安心和讃



れやうごもまだ地獄や餓鬼の中に墮ちやうごも決してその徳を損じたり汚されたりせぬそれは恰も蓮華が汚い泥水の中に生じても決して泥に汚されないのと同じである依つて此の佛性を清淨蓮華と云うたので我等衆生がこの清淨蓮華を持つて居るから我等は總て清淨蓮華明王である。されば此の光明眞言は一切の佛菩薩が我等一切衆生をお護り下さるお思召しでお説き下されたものと云ふことになるのである。

眞言は多  
含

眞言は之を語學の上から翻譯しただけでは格別深い意味は顯れないけれども眞言の一字一字に數限りもない深い意味が含まれてある。これを眞言宗では十六玄門と名けて十六の方面から解釋するのであるが十六と云うても一字に十六の義があるだけではない十六の一つ一つにまた多くの義があるのだから數限りもなく多くの義があるわけである。例へば最初の唵の字に就て云へば此の一字に歸命の義と供養の義と三身の義とある。歸命の義は歸命頂禮の解釋に就て述べたる如く身命までも捧げてお籠りする意である。供養の義とは此の一字を唱へるだけで三世の諸佛に香花燈明飯食などを供養することになる而して世間に

唵字の三  
義

於ても物質の贈物よりは精神の贈物が尊いたゞ精神の贈物は先方へ通じ難いから當方の好意を示すに物質を以てするのである。それと同じく供養に於ても香花等の物質の供養よりは眞言を以てする供養が却つて尊いのである。然し眞言だけでは自己の心がその氣になり得ないから物質をも供養するのである。此の一字に斯様に供養の功德がある。三身の義とは一切の佛に法身報身應身の三身がある三身のことはむつかしいから斯かる小冊子で委しく解釋することはできないが平たく云へば法身は佛の根本精神である報身は悟のまゝの智慧功德の身である應身は衆生を教化するために現はれたる身である。何れの佛にも此の三身があるのだが普通に所謂大日如來は法身阿彌陀如來は報身釋迦如來は應身である。だから此の一字を唱へると大日阿彌陀釋迦の三佛は勿論一切如來の三身を歸命することになるのである。最後の吽の字にしてもその通りで能破の義驚覺の義成就の義など多くの義があつて弘法大師は此の一字だけ解釋するに「吽字義」と名ける一巻の書物をお作りになつた而もこれにはたゞ一少部分を解釋したに止まり吽の一字を釋し盡したとは云はれないのである。斯の如く眞言の一字

吽字の多  
義

一字に多くの深い意味があつて數限りもない功德が備はつてあるから、「一字に千理を含む故無邊の功德備はれり」と云はれたのである。

右に述べたる如く尊き眞言であるから露ばかりも疑はずして唱ふるならば我等凡夫の汚き口から唱へても稱ふる眞言の功德力によりて淨土に往生するのだと傍目をふらずに安心を定めねばならぬ。而してその淨土は阿彌陀如來の淨土なりとも彌勒菩薩の淨土なりともその外何れなりとも有縁の佛菩薩に歸命し奉れば普門大日如來の一徳であるから結局は密嚴淨土の往生である。何卒平生此の旨を信じて念誦相續するが肝要である。

## 第二編 光明眞言和讃

### 第九章 本據及び註釋書

一經と二軌

光明眞言を説ける本據は一經と二軌とある。初めに一經とは唐の菩提流志三藏の翻譯したる『不空羂索神變眞言經』三十卷の中第二十八卷に「清淨蓮華明王品」と「灌頂眞言成就品」とある。此の經は大體釋迦如來又は其の他の菩薩の説であるが、「灌頂眞言成就品」に限りて十方三世の一切如來及び大日如來のお説きなされたので、その中に光明眞言が説かれてある。高祖弘法大師は三十卷の中第六卷と第二十卷とだけ御請來になつたので、光明眞言の説かれたる第二十八卷は御請來にならなかつた。而して此の經全部を請來したのは天台宗の慈覺大師と智證大師とである。然し弘法大師は全部御請來にはならなかつたけれども、『眞言宗所學經律論目錄』に此の經を載せてあるより推せば唐土に於て御覽になつたものと思はれる。次に二軌とは第六祖不空三藏の翻譯なされたる『不空羂索

毗盧遮那佛大灌頂光明真言』一卷と同しく不空三藏の翻譯『毗盧遮那佛說金剛頂經光明真言儀軌』一卷とである。二軌の中『大灌頂光明真言』は『不空羂索經』第二十八卷の『灌頂真言成就品』を要略したもので、その内容は前途同じである。是れは弘法大師が御請來なされた『金剛頂光明真言儀軌』は不空三藏の翻譯と云ふけれども文章が至つて拙く正確なる漢文になつて居ない且つ何人の請來と云ふことも明白でないからその真偽に就て古來多く疑はれて居る。光明真言の尊き功德を説くに便宜であるから往々引用せられてあるけれども我國の好事者の作つたものだと云ふ説が允當らしい。

主なる註

次に光明真言に關する註釋の主なるものを列舉して廣く學ばんとする者の參考の資に備へやう。

- 一、光明真言勸發記一卷 河内通玄律師正徳元年六月作。是れは『不空羂索經』の『灌頂真言成就品』を解釋したので、真言には解釋を施してない。
- 二、光明真言經照闇鈔三卷 豊山亮汰僧正作、延寶八年十月添削して出版した。是れは『金剛頂光明真言儀軌』を解釋したもので、亮汰僧正は此の儀軌を決して

偽作でないと思つて居られたのである。是れも真言の解釋は極めて簡單である。

三、大灌頂光明真言經鈔一卷 同師の著作の時も大略同じ頃であらう。是れ等二部の鈔は廣く用ひられたものと見ゆ、鈔に對する註釋が數種ある。

四、光明真言直談鈔一卷 天正十九年六月岩城藥王寺祐宣僧正五十六歳の時の作である。僧正は後に京都智積院二世の席を董した人である。

五、光明真言和談鈔一卷 攝津勝尾寺以空上人作、寛文七年開板。此の書は主に『金剛頂光明儀軌』に依りて、淨土門の念佛往生と對辨してある。是れに對して眞宗の無漸愧乞入と稱する人が、『和談返破』を著して彈斥したるを見ても此の書が幾分の影響のあつたことがわかる。

六、光明真言句義釋一卷 貞應元年四月十九日、桐尾明惠上人六十歳の時の作である。

七、光明真言加持土沙義一卷 同じく明惠上人の作で、嘉祿三年五月十六日であるから上人六十五歳の時である。尙ほ此の外に同上人の作で『光明真言土砂勸信記』二巻と、『光明真言土砂勸信別記』一卷とある。

八、光明真言四重釋一卷 高野山道範阿闍梨の作である。  
 九、光明真言鈔一卷 慶長九年十月二十一日高野山蓮華三昧院の頼慶阿闍梨四  
 三十歳の時の作である。  
 十、光明真言觀誦要門二卷 天和三年河内延命寺淨嚴和尚四十五歳の時の作で  
 ある。此の書は題の示す如く觀誦の要を明すので、句義は釋せずして、真言の一字  
 一字に就て字義を重々に釋し、その他禪觀の用意等を委しく明してある。  
 十一、光明真言金壺集一卷 河内九華山の蓮體和尚が寶永六年以來處々に於て  
 本書の講義をなし享保六年六月十五日定稿として清書したものである。  
 十二、光明真言袖鑑一卷 明石密藏院密嚴比丘明有阿闍梨の和解に依りて、天保  
 九年九月に作られたのである。  
 十三、光明真言初學要覽鈔一卷 河内延命寺上田照遍和尚の作で、明治十二年に  
 出版せられた。其の内容は一真言の出處、二真言能說の主、三真言の得名、四真言の  
 句義釋、五真言の字義釋、六真言觀誦の作法、七真言加持土砂の七段に別けて、初學者  
 にも善く解るやうに釋してある。

第六の『光明真言句義釋』より第十三の『初學要覽鈔』までは、何れも長谷寶  
 秀僧正の編纂せる『真言宗安心全書』下卷に收められてある。

第十章 光明真言に歸命す

歸命頂禮大灌頂 光明真言功德力

諸佛菩薩の光明を 二十三字に藏めたり

歸命の意  
 是れは先づ最初に光明真言の功德力を信仰し、その法門に教ふる所の如く安心  
 して、自己の生命までもお任せする。何故にそれ程までに此の真言を信仰するか、  
 此の真言の功德が何故にそれ程に尊いかと云ふに、諸佛菩薩の悟つてござる智慧  
 の光明が悉く此の二十三字の真言に含まれて居るので、總ての法門の中で此の真  
 言が最も尊いからである。斯様な意味を述べたのが此の最初の四句である。  
 「歸命頂禮」の義は『真言安心和讃』の講義に於て解釋した通りであるから、今  
 更めて釋する必要はない。  
 「大灌頂光明真言功德力」と云ふに就て、光明真言と名けるわけを述べやう。普

灌頂の意

通には光明眞言と呼んで居るけれども、『不空罽索經』には「十方刹土の三世の一切如來毗盧遮那如來一時に皆右の無畏の手を伸べて清淨蓮華明王の頂を摩でて同じく不空大灌頂光眞言を説きて曰はく」等とあるから、「不空大灌頂光眞言」と云ふのが正しい名である。不空は佛自身に就て云へば一切の徳を圓滿に具足して少しも缺けたる所なきを云ふのである。又佛と衆生との關係から云へば衆生がもし佛を見るか法を聞くとか何かで佛に觸れたならばそのまゝ空しく過ぐる者なく必ず無上菩提の因縁となるのである。大灌頂とは佛道行者が佛の加持を被りて佛の仲間に入り佛の位を受け嗣ぐ作法である。印度に於て國王の太子が王の位を繼ぐ時に領地内の水を取りて瓶に入れ之を太子の頂に灌ぐのである。即ち是れ王族の受職の灌頂である。佛敎に於て行ふ灌頂も是れに似て居る。即ち佛の眞言を以て加持した五智の水を灌頂の大阿闍梨が受者の頂に灌ぐのである。太子が領内の水を頂に灌がれてその領地の司配權を得る如く佛道行者は五智の水を頂に灌がれて五智の如來の位を受け嗣ぐのである。現時行はれる灌頂は右の如き作法であるが灌頂の方法には種々ありて五智の水を灌ぐ代りに五

衆生の爲の灌頂

智の光明を以て衆生の頂を照らす方法がある之を放光灌頂と名けるのである。『不空罽索經』に大灌頂光眞言を説いた後に、「快哉牟尼尊善く明王に眞言大威力の光王灌頂法を授く」と説かれてあるから灌頂とは放光灌頂を云ふのである。大を加へたのは此の灌頂を尊ぶ意味である。依つて不空大灌頂光眞言とは自利利他の萬徳を圓滿に具足し五智の光明を以て衆生に放光灌頂する所の眞言と云ふのである。此の眞言を以て如來が當に清淨蓮華明王に放光灌頂をなされたばかりではなく一切の衆生が總て此の眞言によりて如來の放光灌頂を受けることができるのである乃ち經の文に「若し諸の衆生具さに十惡五逆四重の諸罪を造ること猶ほ微塵の斯の世界に滿てるが如し中略大灌頂光眞言加持土沙の力を以て時に應じて即ち光明身に及ぶことを得て諸の罪報を除き」云々と説かれてある。即ち如何に罪の深い衆生と雖も眞言加持の力によりて功德智慧の光明を受け一切の罪を消滅する所の眞言であるから光明眞言と名けるのである。

佛菩薩總

此の光明眞言は十方刹土の三世の一切如來毗盧遮那如來が同時に同一の威儀に住してお説きなされたのである三世の一切如來は過去莊嚴劫と現在賢劫と未

來星宿劫の如來である、その中現在賢劫の一部分と未來星宿劫との如來は、また成佛せず、菩薩の位にござる、又毗盧遮那即ち大日如來は、三世常住の妙法身であるから、大日如來及び十方三世の一切如來と云へば、諸佛菩薩總てである。斯の如き諸佛菩薩が同時にお説きなされた眞言と云ふのは、他に例がない。斯く諸佛菩薩が同時にそのお悟りのまゝを説かれたのであるから、此の二十三字の眞言に諸佛菩薩の功德智慧の光明を全部含むわけである。

### 第十一章 供養の功德

この一字を唱ふれば 三世の佛にこそこそく  
香華燈明飲食の 供養の功德そなはれり

唵字は何の義

唵字には歸命の義、供養の義、三身の義、驚覺の義などある。何れの眞言を唱へるにしても、歸命し信仰せなければならぬ、それで總て眞言は何れも歸命し奉る意味で最初に大抵唵字がある、依つて唵字は一切の眞言の本母である、と云はれて居

る。三身の義とは此の字は阿と汗と摩との三字が集まりて出來た字である、此の三字の中で、阿字は法身の義、汗字は報身の義、摩字は應身の義であるから、唵の一字に三身の義があるのである。供養の義とは此の一字を唱へたならば、香華燈明飲食等の種々の供養物を調へて之を諸佛に供養することになるのである。だから此の三義を合して云へば、三世の諸佛の三身に歸命して香華等を供養することになるのである。

因みに香華燈明等を佛菩薩に供養する意趣を簡單に説明しておかう。佛は神通自在であるから、飯食を供へなければ空腹になる、燈明を捧げなければ足元が暗い、と云ふことは、焼香も決して蚊くすべの爲ではなからう。

供養は六波羅蜜

供養物は種々あるけれども、ついで云へば、闍伽水と塗香と華鬘と焼香と飯食と燈明との六種である。此の六種の供養は菩薩の六波羅蜜の行に當るのである。先づ闍伽の水は布施波羅蜜である、水の能く物に浸潤するは、是れ布施者の廣く施して、親疎を論せず、普く賑はす相である、依つて水を供養するは、布施の行である。塗香は持戒である、戒は清涼の義であるから、塗香を身に塗りて清涼爽快なるは、即

ち持戒の義である。華鬘は忍辱である花はすべて柔和なものであるから、忍辱にあたるのである。焼香は精進にあたる香の一端に火を點すれば漸次に焚焼して少時も休まぬ是れが精進の義である。飯食は禪定にあたる人が満腹すれば心の沈着くは禪定の義である、また食物によりて身を養ふ如く禪定はよく眞智を長養せしめる依つて飲食は禪定の義である。燈明は般若波羅蜜である燈明の光で物を照し見るは般若の智慧でよく理を決擇すると同じだから、燈明は般若智慧である。菩薩の六波羅蜜の如きむつかしい修行をすることのできない我れ等が香華燈明等を供養すれば斯の如く六波羅蜜を修行することになる。また佛道修行する者は自己だけ悟ればよい、自己だけ解脱すればよいと考へて居てはならぬ、迷の世界の衆生を濟度するためには我が身を捨ててもかまはないとの心掛けがなくてはならぬ然るに我々は差當り其れ程大きな利他の行はできない。所が此の六種供養をなせば六道の衆生を救ふことになるのである。それは塗香は八熱地獄を救ひ、花は人天、燒香は八寒地獄、飲食は餓鬼、燈明は修羅畜生及び天を救ふことになるのである。世間に於ても人の親に美味を與へると、その親は直ちに之を子に

供養は六道を救ふ

成佛するも唵の力

分ち與へるが如く、佛は一切衆生に對して一子の愛をもつてござるから我等が佛に供養すれば、それが直ちに六道の衆生を救ふことになるのである。唵字を唱へると斯の如き供養の功德が圓滿するのである。尙ほ唵字の三義に就ては、『安心和讃』の講義の「光明眞言」と云ふ標題の下を參照せられたい。

次に驚覺の義とは、一切衆生に諸佛と異なるない佛性があるけれども、煩惱の酒に酔ひ無明の睡に沈んで居る、それを唵字の功德によりて驚かされ覺まされるのである。『守護國界主陀羅尼經』第九に依れば、釋迦如來が六年苦行して而もまだ成佛することのできない時に、空中に多くの佛が現れて、正覺を成さんと欲するならば、鼻端に淨月輪を想ひ、月輪の中に唵字を觀せよと教へた。そこでその教へられた如くに唵字を觀じて、曉時分に正覺を開いた。釋迦如來に限らず、三世諸佛は何れも斯くの如くして唵字を觀じなければ正覺を開くことはできないのである。だから唵字は大日如來の眞身であり、一切陀羅尼の母である、と説かれてある。これ唵字に驚覺の義があるから、之を觀じて悟が開かれたのである。

和讃には唵字の供養の義だけ擧げて、餘の三義は略せられてあるけれども、是れ

は文句を簡潔にするためにわざと略したのでたごひ和讃に略せられてあつても、唱へる光明真言の功德に於ては決して減らされるわけではないのである。

### 第十二章 不空の大益

我阿彌と唱ふる功力には 諸佛諸菩薩もろごもに

二世の求願を得せしめて 衆生を救けたまふなり

不空の徳

阿目伽は譯すれば不空と云ふ意味である。不空とは空しからずと云ふことで、語を換へて云へば閉然のないことである。佛は煩惱を斷じ、苦界を解脱し、菩提を證することに於て、閉然なく完全に成就してござる。是れが佛の自證に於ける不空の徳である。又佛は覺を開いてござるから衆生に對して限りなき大慈悲心を起し之を救ふ方便に於て閉然なく一切の衆生は見聞觸知する所に隨ひて必ず成佛の因縁となるのである。是れが佛の化他に於ける不空の徳である。斯の如き尊き不空の大益が僅かに阿目伽の三字に含まれて居るのである。此の光明真言は本

佛菩薩の加護

について云へば諸佛菩薩の總主たる大日如來の真言末について云へば諸佛菩薩總てに通ずる真言であるから之を唱へる者には諸佛菩薩が俱にお護りなされ御利益を下さるのである。そのお護りなされて御利益を下されると云ふのも、死んで後に往生させると云ふだけでもなく現世で無病長命ならしめると云ふばかりでもない。現世と未來世と二世に於ける種々の願ひ事を悉く得させると云ふのである。即ち此の真言を唱へたならば藥師如來は衆病悉除の願によりて身心の病氣を治し、文殊菩薩は般若の徳によりて智慧を授けて妄想戲論を絶ち、觀世音菩薩は普門示現の誓によりて七難三毒を除き、また衆生の本性の清淨なること、恰も蓮花が泥中にありて而も泥に染まらないやうなものであることをお示しになり、虚空藏菩薩は寶珠の三昧に住して無邊の福智を與へて下され、阿彌陀如來の極樂淨土も彌勒菩薩の都卒内院もみなこの真言の功力によりて往生せられるわけである。『不空罽索經』には、此の真言の功力によりて病氣平癒とか議論に勝つとか貴人の敬愛を得るとか極樂に往生するとか現當二世の多くの御利益のあることを説かれてある。



現世利益の意趣

宗教は活ける人門を相手にせなければならぬ現世に望のない人の死後の準備ばかりのものでない然るに現世の幸福を祈るのをば誤まれる信仰として大層嫌ふ者がある。現世の物質上の幸福のみを祈つて精神生活の向上を忽諸にするは誤まつて居るけれども徒らに死後のことにのみ信仰が必要であつて現世のことは省みる要がないと云ふやうな態度も正しいものとは云はれないであらう。我等は食はなければ飢え着なければ寒い所の肉體を持つて居る此の肉體を持つて此の世界に生きて居る以上は現世に於ける幸福をも祈るのは當然である。況や此の肉體は決して卑む可きものではなくて場合によりては即身成佛すらもできる身體であるして見れば現世の幸福を祈るのは決して不都合ではない。然し現世の幸福と云うてもそれは賤しい物欲のためではなくて精神生活の内容を充實し終局の目的たる成佛の資料たらしめるためであることを忘れてはならない。諸佛菩薩がお護り下されて二世の求願を満足せしめたまふと云ふのもつまり衆生を救けて成佛させんがためなのである。

### 第十三章 除暗遍明

吠羅婆と唱ふれば 唱ふる我等がそのまゝに  
大日如來の御身に 說法したまふ姿なり

太陽も及

吠魯左那は即ち毗盧遮那で譯して光明遍照と云ふのである。光明遍照とは光がよく行き亘りて照すと云ふことである。世間で光のよく行き亘りて照すものは何かと云へば太陽である所が此の太陽も晝は照すけれども夜を照すことができず外は照すけれども内を照すことができない然るに今の光明遍照は是れ以上であるから太陽よりも大層勝れたものと云ふので大日と名けるのである即ち吠魯左那とは大日如來である。その大日如來とは遠くお浄土に求めるまでもなく我等の心中に具へて居る所の本有の佛性が即ちそれである。我等は迷の世界にありて煩惱妄想に覆はれて居るから氣付かずに居るけれども我等の心の中には悟の世界の佛と少しも異なるない所の性質が本來備はつてある是れが本有の佛

我等が大

性であり大日如來でもある。我等が吠魯左那と唱ふれば心の内の璞に等しい本  
有の佛性が瑩きあげたる寶珠に等しき悟の世界の如來と同一の作業を發して我  
等の語がそのまゝで大日如來の説法と同一の功力のあるものとなるのである。  
『不空羂索經』に若し人が此の光明眞言を誦するを何處でも聞いたならば一  
切の罪障を除滅するとか數年來の痼疾で困つて居る者があればその病人の前で  
光明眞言を唱へて聞かせると病氣が全快する等と説かれてある。斯かる勝れた  
る御利益のある所以は我等が直ちに大日如來となりて唱ふる眞言がそのまゝ大  
日如來の説法となるからである。如來の説法をきけば罪深き者もその罪を滅し、  
惱み苦める者も安樂となり惡心の者も心を改めて善人となつたなどは多くの經  
典に説かれてある。我等の唱ふる眞言も如來の説法と同一なのだから上に擧げ  
たる如き功德があるので不思議なやうで當然である。

### 第十四章 生佛不二の大印

不生不灭の大印は

生佛不二の印可して

一切衆生を悉く

菩提の道にぞ入れたまふ

摩訶は大と多と勝との三義に譯せられる堅にも横にも邊際のなきを大と云ひ、  
世界を粉微塵にしたよりも數の多きを多と云ひ是の上もなく尊く勝れたるを勝  
と云ふのだと弘法大師はお釋しなされてある。されば摩訶と云ふのは大きな西  
瓜とか澤山な蜜柑とか云ふ時の大や多とは意味がちがふのである。母捺羅とは  
印と譯する約束事の證書に印を捺す學校の卒業證書に印を押すそれで斯様の約  
束したに相違ない是れ是れの學業を修めたに相違ないことを許諾し決定するの  
が印であるだから印とは印可決定の義と古から釋してある。佛菩薩の印に手印  
と相印とありて阿彌陀如來が頭指と拇指とで丸いものをしてござる説法の印と  
か大日如來が左の頭指を右の拳で握つてござる智拳印とか手指の屈伸によつて  
表すものは手印である。觀世音菩薩が蓮華を持ち不動明王が劍を持ち地藏菩薩  
が寶珠を持つてござるなど此れ等の持物はすべて相印である。此れ等の手印や  
相印は佛菩薩の思召を意味するものでその思召が是の印と同一であることを證

明し決定するから、印と名けられるのである。

不二の大印

今大印と云ふは、深く解釋すれば、次の句に出る寶珠蓮華月輪等の相印の總名であつて、是れが諸佛の總主たる大日如來の印である。云ふので、敬ふ意味で大日如來を加へたのである。深く解釋すれば、大日如來の手印を大印と云ふのである。大日如來の智拳印は、一切の衆生に佛と同等なる五智が少しも缺ぐることなく、宛然と備はつてある。故に衆生と佛とは平等である。不二である。云ふ意味を示すのである。大日如來が既に生佛不二であると印可なされるのだから、我れ等衆生に於ても生佛不二と信心決定せねばならぬ。校長からして校印を押した卒業證を渡されるにも拘はらず、私は卒業しませんと拒む者はなからう。大日如來からして汝等衆生は佛と平等である。生佛不二であると印可せられるにも拘はらず、衆生に於て之を信せず、之を拒むわけには行かない。此の生佛不二、即ち凡聖不二と信心決定するの、眞言宗の安心である。此のことは、『眞言安心和讃』の講義の中に委しく述べたから、參照せられるがよい。

大印の功

摩訶母捺羅は即ち大日如來から下さる生佛不二の卒業證書であるから、我等は

未だ卒業しませぬと拒む必要はない、ありがたくお受けすればよいのである。そこで我々は此の摩訶母捺羅の眞言を唱へたならば、それで卒業證書をお受けしたことになるのであるから、生佛不二が全く決定する。既に卒業した者を學生として學校に置くわけには行かぬ。生佛不二と決定した者を迷の世界に留めておくことはできない。そこで、「一切衆生を悉く菩提の道にぞ入れたまふ」で成佛のできる様、その道筋に引き入れて下さる。依つてやがては成佛のできること必定である。と、諦信決定せねばならぬ。菩提は覺と云ふ意味で、菩提の道とは成佛の道である。だから「菩提の道にぞ入れたまふ」とは成佛させて下さると云ふことである。

### 第十五章 如意寶珠

此の世を掛けて未來まで  
福壽意の如くにて 大安樂の身とぞなる

寶珠の徳

摩尼は寶珠の義である。寶珠と云つてもダイヤモンドやルビーのやうなもので

光明眞言和讃

はない如意寶珠である。如意寶珠は果報の勝れたる龍王などの所有するものであつて人間界に之を所有する程の者は殆どないのである。此の寶珠を幢の上に安置して之を鄭重にお祭りすれば意の欲するがまゝに此の寶珠から限りなく金銀財寶等を雨らすと云ふことである。今眞言の摩尼の句を唱へると此の句に如意寶珠の徳があるゆゑだから此の現世にも死後の未來世にも意の欲する如くに福や長壽やその外一切の寶を得られて大安樂の身となることのできると云ふのである。然し斯の如く寶珠から財寶が思ふまゝに湧き出るなど云ふては餘りに話

は食らざるは富

出るものと思ふ必要はない。我等が迷の世界で苦んで居る煩惱の根本は貪瞋癡の三毒である。その中で貪欲とは惜しい欲しいと思ふ心である。我々が物を求めて得難いからそこで欲張る心も起るのであるが欲するがまゝに得られるものに對して欲ばる者はなからう。空気があるとか太陽の光熱であるとかは大抵の場合に容易に得られるから之を貪り惜しがらる人は殆どない。金銀財寶でも自由自在に湧き出るのであれば何人

云何が福

も之を惜しい欲しいと思はぬであらう。依つて如意寶珠は貪欲を退治する徳を備へて居るのである然り衆生をして貪欲を離れて布施の善根を増長せしむる功力を指して如意寶珠と云ふのである。福壽と云ふのも佛敎に於ては決して財産上の裕福なとか肉身の壽命の長いことを意味するのではない。財産や肉身の福壽も望ましいことではあるけれども尙ほ是れ以上に大切なるものがある。佛敎に於て福と云ふのは善根功徳のことである。六波羅蜜を福と智との二に別けると第六の般若は智徳で布施持戒忍辱精進禪定の五は之を福徳と名けるのである。財産上の福は別莊を建てるとか自動車を買ふとか思ひきり有効に使用した所で學校に寄附するとか教育基金に積立てる位なものである。壽命も肉身の壽命は半年で死ぬ病氣を三年壽命延ばすとか長壽と云はれても、「人生七十古來稀なり」など云はれて居る七十歳位は多くあるにしても高々百歳か百二十歳位なもので鶴は千年龜は萬年など云ふのはアテにならない。今謂ふ善根の福は成佛の資糧であつて是れに由りて成佛した上の佛身や佛國までも莊嚴し法身の慧命を相續するのである。壽と云ふのも法身

の慧命即ち佛境界の眞實智慧を壽命とするので、百年二百年の壽命ではない。つまり摩尼の眞言の功力によりて、貪欲煩惱を離れて善根功徳を充分に積み重ね佛身を成就し佛國を莊嚴し、法身の慧命を相續する、平たく云へば此の世でも未來でも功徳を充分に積んで佛の覺を開くことができる、それでこそ大安樂の身と云ふことができるので、少々境遇が勝れて居るとか、五十年や百年壽命が長いこと小安樂とは云へるか知れぬが、大安樂とは云はれない今は「大安樂の身とぞなる」とあるから、右に述べたる如き佛果の境界を指すものと見ねばならぬ。

### 第十六章 蓮華の三徳

可也唱ふる其の人は いかなる罪も消滅し

華の臺に招かれて 心の蓮も開くなり

鉢頭摩は譯して蓮華と云ふ。花は總て柔和なものであるから、佛に花を供養すれば、忍辱波羅蜜の修行になることを前に述べたが、忍辱の反對は瞋恚である、即ち

淤泥不染の徳

花は瞋恚を消す所の徳がある。花の中でも蓮華は他の花に見られない勝れたる三徳がある。第一には淤泥不染の徳、第二には花果同時の徳、第三には種子不失の徳である。第一の淤泥不染の徳とは蓮華は汚い泥の中に生れるものであるけれども、決して泥に汚れた花は咲かない、極めて淨らかな花が咲くのである、それで蓮華は汚穢の中にありても、その汚穢に染まらない、清淨なるものに喩へられるのである。我々の心の奥に本來備はつて居る所の佛性は煩惱惡業に覆はれやうとも、地獄餓鬼等の中に沈まうとも、決して汚されなから、之を心の蓮など云ふのである。今の和讃の文に「いかなる罪も消滅し」とあるは、即ち此の淤泥不染の徳によりて如何なる罪障も消滅し、迷の世界にある煩惱雜染の我等が、此のまゝ無垢清淨の聖者と同一の資格を得られると云ふのである。第二の花果同時の徳とは、他の花の如く、花が散つてからそらくと果實ができるのは、ちがひ蓮華は花の時から既に果實ができて居る、そこで佛教では之を發心すれば直ちに佛果の決定すること、に喩へるのである。佛教の中でも發心して長い間修行を積んで、其の上で漸く佛果の決定する様に説く教がある、その教によれば修行の途中で障礙に遇う

花果同時の徳

て修行を廢することがあるから發心の時にはまだ佛果は決定せぬと云ふのである。所が眞言密教では此の法に遇うて信心を發す者は法の力によりて必ず成佛することができると云ふのである。依つて青龍寺の惠果阿闍梨は「胃地の得難きには非ず此の法に遇ふことの易からざるなり」と示し弘法大師は「迷悟は我れにあれば發心すれば即ち到る」とお諭し下されてある。第三の種子不失の徳とは他の植物は花が咲いても實らぬことがあつたり實つても生ねぬ種子ができたりする然るに蓮華には必ず實ができる而して其の實が必ず芽を生ずるを云ふのである。佛教では之を衆生本有の佛性が三界六道の中如何なる惡趣に沈むとも決して失はれずに遂には覺を開くことに喻へ又は一たび曼荼羅を拜し一遍の眞言を唱へる如き極めて些細なるが如き善根も決して失はれずにやがて成佛の因縁となることに喻へるのである。今眞言の鉢頭摩の句を唱ふれば蓮華の三徳によりて一切の罪障を消滅して清淨になり花果同時であるから佛前で眞言念誦する時既に淨土の華の臺に招かれて菩薩聖衆の仲間に入り種子不失であるからやがて心の内の佛性の蓮を開くことができるのである。

種子不失の徳

### 第十七章 光明攝取

吾等唱ふる光明に

無明變じて明となり

數多の吾等を攝取して

有縁の淨土におき給ふ

智慧の光

入縛羅は光明と譯する此の光明は室内を照す電燈や海上を照す燈臺や炭坑内を照す瓦斯燈などとはちがふ。愚癡は事物の道理がわからないので恰も暗中に於て物を見れば僅かに一尺前にあるものでも少しも見えないが如くである。だから愚癡を暗黒に喻へて佛教では之を無明と名けるのである。今謂ふ所の光明は即ち無明の反對で智慧のことである。智慧はよく事理を辨へること恰も明かなる所で物を見れば方圓三角等の形を明瞭に判別し得るやうなものであるから智慧を光明と云ふのである。凡そ我々衆生は智慧がないから種々の惡業を造るのである。道理がわからないから貪る可からざるに貪り、瞋る可からざるに瞋り、正しき法を謗つたり自分が尊くもないのに尊いやうに思うて驕つたりするのである。

光明眞言和讃

百八煩惱とか、八萬四千の塵勞とか云ふけれども、その本は貪瞋癡であり、更にその本を云へば愚癡即ち無明の外はない。斯く云へば或は悪事を爲す者必ずしも智慧が足らぬとは限らぬ、寧ろ高等の教育を受けたる智識階級の者が愚癡なる手段を以て犯罪することがあるでないかと非難するかも知れない。然し難者の云ふが如きは實の智慧ではない所謂愚賢いとか猿智慧とか云はれるものであつて當面のことだけ見えて遠大なる後のことにまで考が及ばないのである。

我等が今此の入縛羅の句を唱ふる時は、その光明に照らされるから愚癡無明が變じて智慧明かになる智慧明かになると云つた所が有漏智即ち迷中に於ける智慧所謂猿智慧が増すのでないから急に良い考が出来た様になつたとか從來知らなかつたことが直に知れるやうになつたとか左様なことはないけれども、我等の知らぬ間に幾分佛智が開かれるのである。無明の障が消えて佛智が開かれるから聖者の仲間入りができる。さうなれば佛菩薩は執着がないから古くから悟を開いて居る者とか新に無明を除いた者とか新參古參の區別などはなされずに、吾等を攝取即ちお引き取り下される。而して平生地藏菩薩を念じて居る者は地獄

攝取せられて

菩薩の淨土、觀世音菩薩を念じて居る者は觀世音菩薩の淨土、その他阿彌陀如來藥師如來彌勒菩薩等何尊に限らず縁のある淨土に往生させて下さる、それがみな此の眞言の光明の句に照される御利益である。

第十八章 凡夫を轉易して

引オヤヤを唱ふれば

萬の願望成就して

佛も我等も隔なき

神通自在の身を得べし

如何に轉易する

鉢羅鞞多野とは轉の義、易の義で、即ち轉換し變易する意味である。言ふ意は、此の眞言を誦すれば貪欲を轉じて布施に易へ瞋恚を轉じて忍辱に易へ愚癡を轉じて智慧に易へ迷を轉じて悟に易へ穢土を轉じて淨土に易へ、凡夫を轉じて佛に易へる等の功德がある。斯の如く自由自在に轉じ易へられるのであるから、すべて望み通りに我等の境遇を易へることが出来るわけで、從つて萬の願望は悉く成就するのである。

凡夫と佛

凡夫と佛とはどれだけの差異があるか云ふに悟を開いてござるのが佛で迷うて居るのが凡夫である悟を開いたならば智慧の光明の明かなること白晝に物を見るが如くで自由自在である。之に反して迷の凡夫は智慧の光明がないから暗夜に事を作せば總て不自由なると同じことである。即ち佛は自在のお方凡夫は不自由なるものである然るに今眞言の功力によりて萬の願望成就すると云ふから全く自由自在の境遇となるので佛と我等と隔なく全く同等の境遇となることができるのである。佛と同等の境遇と云へば佛は神通自在のお方であるから我等も神通自在の身となるのである。

六神通

神通とは如何なるものか云ふに神通に六種ありて之を六通と云ふのである。六通とは一には天眼通二には天耳通三には神境通四には他心通五には宿住通六には漏盡通である。天眼通とは明暗に拘はらず他方世界のこともまでも透視のできる通力である。天耳通とは遠近に拘はらず他世界の聲までも聞き得る通力である。神境通は神足通とも名け距離の遠近や中間障礙物の有無や時間の長短に拘はらず自由に往返し得る通力である。他心通とは他の衆生の心を知り得る

である。宿住通とは過去幾億萬年以前にも亘りて自己及び他人の前生のことを知り得るのである。漏盡通とは漏は過失を漏らす意味で煩惱のことである煩惱の全く盡きたる者は執着せぬから苦痛がなく智慧が開かれて居るから一切の事理が明瞭にわかる是れも一種の通力であるから之を漏盡通と名けるのである。眞言を唱ふる功力によつて斯かる神通自在の身となることもできるのである。

### 第十九章 破壊の大力

念字を唱ふる功力には 罪障深きわれが  
造りし地獄も破られて 忽ち浄土と成りぬべし

念字には菩提心の義擁護の義能破の義満願の義大力の義恐怖の義歡喜の義など種々の義が含まれてある。此の一字に斯く多くの意義のあるわけは此の字が阿訶汗摩の四字から成り立つて居てその四字にそれく意義があるからその四字の意義の組み合わせ方によりて種々の意義を含むことになるのである。弘法

意味深い  
念字



大師は「吽字義」と題する一巻の書物をお作りになつて、此の字の意味や功德を説明なされてある。而してその中に斯様なことを仰せられてある、「大日經」や「金剛頂經」に説く所は、「菩提心を因となし、大悲を根となし、方便を究竟となす」と云ふ三句の外はない、一切の教義は此の三句に過ぎぬ、此の三句を束ねて一の吽字となる、千萬の經論も此の三句一字に出でないと。斯の如く意味の深い字であるから委しく説明することは勿論できないが、僅かに大海の一滴ばかりの説明を加へておくことにする。

吽字の功

此の吽字に菩提心の義があるから、之を唱ふれば我々が菩提心を發すことになり、音に菩提心を發すばかりでなく、菩提心と大悲の修行と佛果の方便との三句の義が含まれて居るのであるから、菩提心を發して修行し、やがて成佛することになるのである。菩提心を發した者は、佛菩薩から愛憐し加護せられるのは當然である。乃ち此の字に擁護の義があつて、佛菩薩から守護せられるのである。佛菩薩から守護せられて居るから、地獄の湯鑊や劍林も恐しくない、此等のものは破壊してしまふ、惡魔羅刹なども此字を唱ふる人には怖ぢ恐れて近づかない、即ち是れが能

破の義、恐怖の義である。是の如く佛菩薩に守られて地獄を破り、惡魔を恐れしむる程であるから、偉大なる力である。又如何なる願も能く満足する是れが大力の義、満願の義である。地獄や惡魔を打ち破りて、能く願を満たすのであるから、淨土往生も成佛も思のまゝで、ヤレありがたや尊やと歡喜する是れが歡喜の義である。斯かる多くの深義があるから、簡單なる和讃に於て之を一々述べることはできないが、「罪障深きわれ」が造りし地獄も破られて」とあるは、能破の義、大力の義を述べ、「忽ち淨土と成りぬべし」とあるは、満願の義、歡喜の義を述べられたものである。

### 第二十章 加持土砂の功力

亡者の爲に呪を誦じて 土砂をば加持し廻向せば  
極重惡のともがらも 速得解脱と説きたまふ

是れまでは光明眞言一々の句義に就て其の功德を述べたが、今茲には光明眞言

亡者のた

土砂を加  
持する由

を以て亡者のために廻向すれば勝れたる利益のあることを述べるのである。「不  
空罽索經」に「若し諸の衆生具さに十惡五逆四重の諸罪を造ること猶ほ微塵の  
斯の世界に満てるが如くならん。身壞れ命終て、諸の惡道に墮ちんに是の眞言  
を以て土砂を加持すること一百八遍して屍陀林の中に亡者の屍骸の上に散じ、  
或は墓の上塔の上に散じ遇ふごとに皆之を散せば彼の亡せる所の者若しは地獄  
の中にもあれ若しは餓鬼の中にもあれ若しは修羅の中にもあれ若しは傍生の中  
にもあれ一切不空如來不空毗盧遮那如來の眞實本願大灌頂光眞言にて加持せる  
土砂の力を以て時に應じて即ち光明身に及ぶことを得て諸の罪報を除き苦めら  
るゝ身を捨て、西方極樂國土に往きて蓮華に化生し乃し菩提に至るまで更に墮  
落せず」と説かれてある經文の意味を和讃に今の四句にて示されたのである。  
「土砂をば加持し廻向せば」とあるが經文には「土砂を加持すること一百八遍」  
とある、木の葉でも米粒でも宜かりさうなものを特に土砂を加持すること限つた  
わけは佛意測り難いけれども私に思ふに淺深の二義がある。淺略の意から云へ  
ば佛の大悲方便は成る可く容易くして汎く一切に蒙らしめるを本意とする、然る

五逆四重  
の者も

に他の物であれば時として得られないことがあるかも知れぬが土砂なれば地球  
上何れの處にても之を得られない所はない故に汎く一切を救ふ趣意によく適合  
するのである。深秘の意から云へば土砂は六大の中では地大である、地大は五字  
眞言の中では阿字である、阿字は一切の音聲文字言語の根本であるから一切の眞  
言は阿字に攝められる。今一切の佛菩薩の總てに通ずる光明眞言は結局阿字の  
眞言である故に光明眞言を以て土砂を加持するは阿字を以て阿字を加持するの  
で、よく加持の理に相應するのである。加持とは感應の義往來の義である、鐵が磁  
石に感じ磁石が鐵に應ずる如きである。土砂に阿字の義があるから眞言の阿字  
に感じ眞言の阿字が土砂の阿字に應ずる、斯く眞言と土砂と互に往來して土砂が  
眞言と全く同等の功德を有するものとなるのである。廻向とは此の方に於て修  
したる加持土砂の功德を廻らして亡者の方に向けるのである、總て一方にて修し  
たる功德を他方に向けて施すことを廻向と云ふのである。

「極重惡のともがら」とは經に「諸の衆生具さに十惡五逆四重の諸罪を造る」  
と説ける所の者である。十惡とは平生唱ふる十善戒の反對であるから別に説明

を須つまでもない、五逆とは父を殺すと、母を殺すと、阿羅漢即ち佛道の覺を開かれたる有徳者を殺すと、佛の身より血を出すと、和合して修行にいそしめる僧侶の團體を破るとである。此の父母、阿羅漢、佛、和合僧は重大なる恩のあるものである。而も之を殺し又は損すれば、その恩に背くから逆である。普通の恩も怨もない者を殺すよりは罪が重いのである。だから阿彌陀如來の第十八願にも、あらゆる衆生を救ふけれども、五逆と正法を誹る者は救はれないと仰せられてある。四重とは殺生、偷盜、邪淫、妄語とである。此の四は自己を損し他を惱ますことが甚だしから、殊更に之を重き罪とするのである。斯かる罪の重き者でも、加持土砂の功力によりて速かに地獄餓鬼畜生等の苦み多き身を捨て、淨土に往生して蓮華に化生し、菩提に至るまで再び墮落することはないと説かれてある。「速得解脱と説きたまふ」とは即ち此の意である。

### 第二十一章 醍醐の妙教

眞言醍醐の妙教は 餘教超過の御法にて

無邊の功德具はれり 説くごもいかで盡すべき

五藏中に  
最勝

上には光明眞言の功力によりて、極重惡の輩も速かに解脱せられることを述べられたが、此の四句は光明眞言に局らず、眞言陀羅尼は他の教よりも勝れて尊い法門であることを述べられたのである。

『六波羅蜜經』に次の如く説かれてある。如來のお説きになつた教法は多數あるけれども、之を五藏につめられる。五藏とは一には契經、二には調伏、三には對法、四には般若、五には眞言陀羅尼である。即ち眞言宗以外の一切の佛敎を初めの四藏中に攝めることになる。而して前の四藏はみな相當に智慧才覺のある者の修行する法であつて、その修行が容易でない何人でもその御利益を蒙ると云ふわけに行かぬ。四重五逆を犯した者、佛の正法を誹りて他人の信仰までも妨げるやうな罪人などは、前の四藏で救ふことはできぬ。必ず眞言陀羅尼の法に依らなければならぬ。食料品に喩へると牛乳から酪を製し、更に人工を加へて生酥とし、熟酥とし、最も精製したものが醍醐である。醍醐は最も滋養に富み、薬用品として最も優

醍醐の妙

れたものである。前の四藏は乳酪生酥熟酥の如く、眞言陀羅尼は醍醐の如くである。頻死の重病人は醍醐でなければ効能のない如く、罪障の極めて重い衆生は、眞言陀羅尼に依らなければ救はれない。『六波羅蜜經』に斯様に説かれてあるから、それを和讃に「眞言醍醐の妙教は、餘教超過の御法にて」と示されたのである。

右に述べたる如く、眞言は他の教に勝れたる尊い法であつて無限の功德を具足してある。だから之を幾程説明した所で到底説明し盡すことはできない。弘法大師が「眞言は不思議なり、觀誦すれば無明除くる、一字に千理を含み、即身に法如を證す」と讃歎なされたのも尤もなことである。

### 第二十二章 眞言の大意

光明眞言の和譯

是れまで光明眞言の一句々々に就て解釋したが、全體に就ての大意を心得て居らなければならぬ。今之を概括して簡単に翻譯すれば、  
唵効驗空しからざる遍照の大印よ、寶珠即ち福德と、蓮華即ち慈悲と、光明即ち智慧とを有せるものよ、轉せしめ給へ、呼

と云ふ意味になる。唵を歸命の義とか三身の義とか供養の義とか釋し、呼を大力の義とか破壊の義とか云ふけれども、是れは文字の成立の上から、開様に解釋せられ、開様な功德があるのだけれども、開様に譯す可き語ではなく、翻譯することのできない秘密語である。「轉せしめ給へ」とは、我等衆生をして、福德慈悲智慧を有せる遍照の佛果に轉じ、入らしめ給へと云ふのである。

五智如來に配す

又此の眞言は一切如來の眞言であるが、一切如來は五智の如來におさまるから、此の眞言を五智の如來に配當する解釋がある、それは次の如くである。

- 阿目伽吠魯左那 アムカヘイロサナ 法界體性智 ハツカイタイセイチ 大日如來 ダイニチニライ
- 摩訶母捺羅 マカボダラ 大圓鏡智 ダイエンキョウチ 阿閼如來 アケルニライ
- 摩尼 マニ 平等性智 ヒトウテイセイチ 寶生如來 ホウシュニライ
- 鉢頭摩 ハツトウマ 妙觀察智 ミョウカンサチ 阿彌陀如來 アミダニライ
- 入縛羅 ジュバクラ 成所作智 ジョウサクサチ 釋迦如來 シヤカニライ
- 不空遍照 フクウベンショウ 大印 ダイイン 寶珠 ホウジュ 蓮華 レンゲ 光明 クワウミョウ 何故に五智に當るのであるか、又五智とは如何なる意味であるか等を説明する筈であるけれども、通俗

光明眞言和譯

を旨とせる本講義に於ては、あまりに六ヶしくなるからすべて略することにする。

### 第三編 弘法大師和讃

#### 第二十三章 由來及び大師傳

大師和讃  
の由來

『弘法大師和讃』は尾道市西國寺の佐伯慈明和尚の作である。それより前に備後鞆津福禪寺の山本寂明僧正の作られたる和讃があつた。僧正は明治に於ける布教の元祖とも云はる可き人で、その和讃は極めて通俗に下きて居る。然し是れはあまり平易に流れて優美な點が少いのだ。大師の行狀を述べるに、肝要なことが漏れて居たり一つの事に多くの詞を費してあつたりするので、今少し適當なるものを全國へ一般に流布せしめるやうにしたいと云ふので、問題になつて居た。明治十一年に高野山で布教會議が開かれて、其の時に和讃を一定することを議り、會議に列席の人の作が數篇あつたけれども、佐伯慈明和尚の作られたる和讃が最も佳いと云ふので、それを用ふることに定めた。それが現行はれて居る和讃である。尚ほ和尚は自作の和讃を敷衍して『野峰松韻』と題せる書を作られたが、十一年

七十二  
の布教會議の最中にその出版ができあがったので、此の和讃の流布に一層力を添へたのである。

大師の傳記

此の和讃は大師の行状を述べて、その御功績をお讃めするものであるから、委しく講義をすれば大師の御傳記を詳細に述べねばならぬことになる。然し今は大師の御傳記を作るのが主意ではなうて、和讃の講義が本意であるから、和讃の文に顯はれたることのみに就て簡単に述べることにする。若し大師の御傳を詳細に知らんとせば多くの御傳記があるから、それ等の書籍を抜き見られたい。今參考のためにその主なるものを左に掲げることにしやう。

一、空海僧都傳 一卷 大師の上足で『性靈集』の編者なる眞濟僧正の作である。

二、贈大僧正空海和上傳記 一卷 貞觀寺座主の記と云ふ然しその貞觀寺座主は大師の上足眞雅僧正であるか、或は醍醐山の開祖理源大師であるか明かでない、恐らくは後者であらう。

三、弘法大師傳 一卷 後宇多法皇の御製で、御宸翰の本は現に嵯峨の大覺寺に

秘藏してある。以上の三本は『弘法大師全集』の首巻に收められてある。

四、弘法大師行狀集記 遍照寺經範法務撰。

五、弘法大師廣傳 二卷 醍醐金剛王院聖賢僧正撰。

六、弘法大師行狀要集 六卷 東寺賢實阿闍梨撰。

右三本は極めて重要なものであるけれども、まだ出版せられずに寫本で傳はつて居る。

七、弘法大師略頌鈔 一卷 道範阿闍梨註仁和寺二品親王の敎命によりて、文暦元年七月二十一日に作り畢る。

八、弘法大師年譜 十二卷 高野山得仁阿闍梨撰。

九、弘法大師正傳 四卷 醍醐寺座主高演大僧正撰。

右二本は天保四年十一月に出版せられた。

十、眞言傳 第二卷 勸修寺榮海僧正撰。

十一、元享釋書 第一卷 臨濟宗南禪寺師鍊撰。

十二、東國高僧傳 第二卷 支那沙門高泉撰。

十三本朝高僧傳 第三卷 臨濟宗の師靈撰。  
以上主なるものだけ出したのである。

第二十四章 出世ご立誓

歸命頂禮遍照尊  
玉藻歸るてふ讚岐瀉  
御歳七つの其の時に  
五の嶽に立つ雲の  
寶龜五年の六月に  
屏風が浦に誕生し  
衆生の爲に身を捨て、  
立つる誓を頼もしき

大師の十  
初めの一句は弘法大師に歸命する詞であり、次の三句は出世を述べ、次の四句は幼少にして深き誓願をなされたことを歎ずるのである。歸命頂禮は前々に釋した通り。遍照尊とは遍照金剛尊であつて、弘法大師のことである。大師の十號と云つて、在俗の名や尊稱やなどを集めると十種の名がある。御誕生の最初に眞魚と命名した御幼少の頃御両親は貴物と呼んで寵愛し、世人は神童と稱した。その

遍照金剛

後佛道行者となりて無空と云ひ、教海、如空、空海と改め唐にありて、徳宗皇帝より五筆和尚の稱號を受け、青龍寺に於て灌頂入壇の時に師の惠果阿闍梨から遍照金剛の號を授けられ、御入定後に醍醐天皇から勅諭せられたのが、人のよく知れる弘法大師である。元來遍照金剛と云ふは大日如來のことである。日がよく萬物を照して常恒に變らないが如く、如來の智慧は遍く一切を照すから、遍照と名け、此の佛の徳は眞實不變であるから、堅くして破壊せられぬ所の金剛に喩へられる。由て大日如來を遍照金剛と云ふのである。然らば、一步進めて、遍照金剛は金剛界の大日か胎藏大日かと云ふに、遍照は胎藏大日で、金剛は金剛界大日だとか、遍は胎藏照は金剛界、金剛は兩部に通ずるとか云ふ解釋もあるけれども、金剛胎藏兩部ともに遍照金剛と云ふのである。灌頂に入壇すれば阿闍梨から金剛號を授けられるのであるが、大師は灌頂投花に於て大日如來を得られたから、大日如來の異名たる遍照金剛と云ふ號を授けられたのである。

御誕生  
「寶龜五年の六月に」等の三句は大師の御出生を述べるのである。大師は人皇第四十九代光仁天皇の御宇、寶龜五年甲寅の歲神武天皇紀元一千四百三十四年六月  
弘法大師和讃  
七十五

月十五日に、讃岐國の海邊に近き屏風が浦に於てお誕生あらせられた。御父は讃岐國造佐伯直字は田公諱は眞氏と申上げるお方で、御母は阿刀氏の女である。阿刀氏は世々學問を以て家を成して居るので、佐伯氏とは古くから御親族であつたと云ふ。

屏風が浦

「玉藻歸る」とは讃岐の枕詞である。「萬葉集」にも「玉藻よし讃岐の國は國柄か」などある。屏風が浦に就て今の香川縣仲多度郡善通寺町善通寺がその趾である。と云ふのが定説になつて居るけれども別に同郡白方村海岸寺を佐伯家の館趾だとする異説がある。屏風浦と云へば海岸である可きで、その點から云へば海岸寺説があたる様だけれども、多度津丸龜金倉寺善通寺のあたり一帶に平地であるより考ふれば、此の邊一帶に海又は潟であつて今の善通寺なども浦邊であつたものと思はれる。

捨身誓願

「御歳七つの其時に」等の四句は捨身誓願を歎する文である。大師は寶龜十一年御歳七つの時に御館に近き五岳の中なる一の峰に登りて誓願なされた。「我れ一生に成佛して衆生を濟度したい、それが出来るならば今如來の證明にあづかり

たい若しそれができぬならば身を以て諸佛に供養して來世を期せん」と斯の如き誓をなされて岩の上から深き谷に向つて身を投げた。所が不思議なことに天人が之を抱き承けて元の岩の上にお居申した。その時に谷間から奇しき雲が立ち上りて、その中に釋迦牟尼如來が寶蓮華に坐し、光明を放つてござるので、大師は自己の誓の空しからざるを知りて大いに喜ばれた。その因縁でその山が我拜師山と名けられて居る。我とは大師であり、師とは佛教の根本の師即ち釋迦如來のことである。五つの嶽とは現今の善通寺の西に屏風の如く列れる山で、香色山、筆山、我拜師山、中山及び火上山である。我拜師山を又は捨身ヶ嶽と云ふのである。

### 第二十五章 眞言宗を傳ふ

遂に乃ち延暦の

末の年なる五月より

藤原姓の賀能等と

震旦船に乗りを得て

弘法大師和讃



しるしを残す一本の  
松の光を世にひろく  
弘めたまへる宗旨をば  
真言宗こそ名けたる

大日經を  
得て

初の四句は法を求めんがために、入唐なされたことを述べるのである。大師は二十歳の御時、和泉國槇尾山寺に於て、勤操大徳に從ひて御剃髮なされ、二十二歳の御時に、奈良の東大寺戒壇に於て、具足戒をお受けになつた。その時には既に當時我國に傳はつて居る佛教は、大概學び盡して居られた而も、當時の佛教には御満足がでなかつた。そこで大佛殿に於て、此の上もなき尊き法門を示し給はれ、祈願なされた而して遂に佛の指示を蒙りて、大和國高市郡久米寺に於て「大日經」を感得なされた。此のお經は秘密の經典であるから、その口訣を聞かねば解せられないのである。然るに何處に行つても、大師に之を教へる人はなかつた。由りて入唐を思召立たれて、勅許を蒙り、桓武天皇の御宇延暦二十三年、神武天皇紀元一千四百六十四年五月、御年三十一歳にして入唐の途に上られた。その時御同道なされたのは、遣唐大使從四位上藤原葛野麿(本名は葛野麿)であるけれど、支那に對しては

入唐

支那風に賀能と云ふのである。副使從五位上石川道益、天台宗の祖師傳教大師などであつた。是れ等の人々が四隻の船に分乘して出發した。然るに海上に於て、難風に遇うて離れ離れになり、大使と大師との乗れる船は八月十五日に支那の福州に着いて、十二月に長安の都に到着した。「震旦船に乗りを得て」と云ふは、震旦(支那)行きの船を指すので、支那の船と云ふのではない。「のりを得て」とは乗ることを得たのと、法を得て日本に弘めたと云ふとの兼帶詞である。

真言法を  
傳ふ

「しるしを残す一本の」等の四句は、真言密教を支那から傳へて之を我國にお弘めになつたことを述べるのである。文句の意味は、一本の松に奇瑞を残されたが、その奇瑞の光によりて象徴せられる法をば、世の中に廣くお弘めなされた、その法は即ち真言宗と名けると云ふのである。松の光とは、何から云ひ出したのであるか。大師は長安に到着の翌年、青龍寺の惠果阿闍梨に遇ひ奉りて、真言密教を學び灌頂をお受けになつた。その年の十二月十五日に、御師の惠果阿闍梨は御入滅なされた。その翌年即ち我國の大同元年八月、御歸朝なされんと、明州の津に御出でになつた時、我國に於ける密教相應の地を卜せんとして、三股金剛杵をお擲げになつた。

弘法大師和讃

後  
御歸朝の  
それが我が高野山に飛び來りて、松樹の上に懸りて光を放つて居た。大師が御歸朝の後高野山に登りて、三股金剛杵の在所を尋ねあて、此處に伽藍を建てたのであると言ひ傳へられて居る。斯かるわけで、松の光を弘めたと言ふのが、眞言密教を弘めたと言ふことになるのである。兎に角、大師は平城天皇の大同元年十二月九州の筑前にお着きになり、其の地の觀世音寺にて越年し翌二年の夏都に歸られた。それから敕によりて和泉の横尾寺山城の乙訓寺、同じく高雄山寺等に住まれたが、嵯峨天皇の御宇弘仁七年御年四十三歳で高野山を開き、同十四年京都九條の東寺を大師に賜はつた斯くて眞言密教は都鄙到る處に廣く弘められたのである。

### 第二十六章 眞言宗の安心

眞言宗旨の安心は  
上根下根の隔てなく  
凡聖不二に定まれど  
下根に示す易行には  
偏に光明眞言を  
行住坐臥に唱ふれば

### 宿障何時しか消果てて

往生淨土に定まれり

上根も下根も

眞言宗の安心を述べる中で初の三句は上根下根に通じて安心を示し、次の五句は特に下根の者の修行法を述べたのである。上根とは佛道修行の上に於て最も根柢となる所の信仰や智慧の勝れて居る者を云ひ、下根とは信仰や智慧の鈍い者を云ふのである。上根の者は成佛するにも易く、下根の者は困難なる可きは當然であるが、安心即ち佛法信仰の方針として心のする方は、「佛も我等もかわらぬ凡夫も聖者も隔てはないのだ」と云ふのが上根にも下根にも通じて動かぬ安心である。上根の凡夫は聖者と隔てはないが、下根の凡夫は何處までも凡夫で佛とは全く別物だなどとは云はないのである。若しも佛と我等と全く別物であるならば、我等は如何にしても佛になることはできない筈である、それは恰も瓦を如何に磨いても黄金にならないのと同様である。だから眞言宗以外の宗旨に於ても、凡聖不二を云はないことはない、然し眞言宗には此の凡聖不二を實地に現す可き修行法が整うて居るのに反して、他の宗旨にはその道具だてがない、されば他宗の

聖脚本と舞

下根の易行

凡聖不二説は譬へば脚本だけありて舞臺や衣装のないのと同じである。此のことに就ては『真言安心和讃』の講義に於て詳しく述べたから参照せられたい。

真言宗には凡聖不二を實地に現す可き修行法が整うて居るとは云ふものゝ、それは上根の者の修行法であつて、それを修行し得ない下根の者は如何するかと云ふに、下根の者の修す可き簡易な行は偏に光明真言を唱へるだけでよいのである。それも佛前に坐してとか手を洗ひ口を嗽いでとか毎日三時に限つてとか六ヶしい規則があるのではなく、淨穢を簡ばず行住坐臥如何にしてなりとも差支ない、我等の膝や手や口に功德があるのではなく、光明真言に功德があるのだから如何にしてなりとも唱へるなれば前生前前生やズツト過去世から積もり積まれる罪や障も何時の間にも消えてしまひ、往生淨土と定まつて居るのである。光明真言に斯かる尊き功德のあることは、『光明真言和讃』に於て詳しく示されてあるから、今茲に贅言する要はない。

第二十七章 嬉しや鳶蔓

不轉肉身成佛の 身は有明の苔の下  
 誓は龍華の開くまで 忍土を照す遍照尊  
 仰げばいよく高野山 雲の上人賤の男も  
 結ぶ縁の鳶かづら 縋りて登る嬉しさよ

初の二句は大師が即身成佛なされて、その肉身を高野山に留めてござることを述べ、次の二句は廣大なる御誓願を以て、五十六億七千萬年の後に彌勒慈尊の御出世まで此の娑婆世界の衆生をお救ひ下さることを讃し、次の四句は大師の肉身を留めたまへる高野山は尊い靈地であることを歎するのである。

真言宗の安心は凡聖不二であつて、而も之を實現す可き修行法も完全に備はつて居ることは前に述べた通りである。凡聖不二を實現するは即ち此の身の儘で成佛することである、即身成佛することである。真言宗以外の宗旨では即身成佛

即身成佛の教

のできることを云はない、依て大師が真言宗旨をお弘めなさるに際して、即身成佛などのできる筈はないと、他宗の者が非難した。それに對して大師は「即身成佛義」をお作りなされて、真言宗の法門によれば、即身成佛ができること、お經に説かれてあり、またその道理がたつのであること、云ふことをお示しなされた。即身成佛の道理を詳しく述べんとすれば、「即身成佛義」を全體講義せなければならぬが、一言に云へば、凡聖不二なるが故に、云ふ外はない。次にお經に説かれたる文を少し出して見れば、「金輪時處儀軌」には、「此の三昧を修する者は、現に佛菩提を證す」と説き、「觀智儀軌」には、「若し能く此の勝義に依りて修すれば、現世に無上覺となることを得」と説き、「菩提心論」には、「真言法の中にのみ、即身成佛するが故に、是に三摩地の法を説く諸教の中に於ては、關けて書さず」と説き、または「若し人佛慧を求めて、菩提心に通達すれば、父母所生の身にて、速かに大覺の位を證す」とも云はれてある。

大師の即身成佛

大師は一生に成佛して衆生を濟度せんことを御歳七つの時に御誓願なされて、釋迦如來の御證明をお蒙りなされ、二十二歳の御時には、此の上もない尊き法門に

遇はんことを祈願なされて、佛の指示によりて「大日經」を得たまひ、その結果即身成佛の真言密教をお弘めになつたのであるから、大師が即身成佛なされぬ筈はない。されば清涼殿に於て宗論の時に、大日如來の御姿になられたと云ふのも、即身成佛であらう承和二年の三月二十一日に御入定なされて、肉身をそのまま留めてござると云ふのも、即身成佛であらう、そればかりではなく、普通の人間とは全く比較することのできない程の偉大なる御事蹟を以て終始せる御生涯は、全部佛陀の作業と窺はれるのである。或る人は斯く云ふかも知れぬ、大師が偉大であつたのは云ふまでもないが、矢張り人間並みの生活をなされた即身成佛などは、思はれない。それには次の如く答へる、釋迦如來の成佛も佛敎の徒は之を信するけれども、外道は之を首肯せない、外道の信する者とは、釋迦如來の成佛に差異はない、大師の成佛も信する者は信じ、信せない者は信せないまで、大師の徳に於ては何等支障はない筈である。

和讃に「不轉肉身成佛の身は、有明の苦の下」とあるは、延喜廿一年醍醐天皇の御夢枕に大師が立たせたまひて、「高野山結ぶ菴に袖くちて、苦の下にぞ有明の月」

龍華開く  
まで

とお告げなされたその歌に因みて父母から生れたる肉身そのまゝに成佛なされ  
てその御身軀を苦むす高野山に嚴然と留めてござると云ふのである。  
弘法大師の『御遺告』の第十七條に「吾れ閉眼の後には必ず方に兜率陀天に  
往生して彌勒慈尊の御前に侍す可し、五十六億餘の後には必ず慈尊と御共に下生  
し祇候して吾が先跡を問ふ可し。亦且つは未だ下らざる間は微雲管より見て信  
否を察す可し、是の時に勤あらば祐を得ん、不信の者は不幸ならん」と御誓願なさ  
れてある。即ち大師は御入定の後は兜率天に往生なされる而して彌勒菩薩が五  
十六億七千萬年の後に此の世界に下生なされる時には御供をして下つて來られ  
て彌勒菩薩の御化導をお手傳ひする、また今世に於ける御遺跡をお訪ひあそばす。  
尙ほ此の世界に御下生あそばすまでは兜率の内院から信仰の厚い者と信仰のな  
い者ごを御覽になる、その時に信心深い者は御利益を蒙ることができ、信仰の  
ない者はお加護を蒙ることができないと云ふのである。此の意味を和讃に「誓  
は龍華の開くまで忍士を照す遍照尊」と示されたのである。彌勒菩薩が此の世  
界に下生なされて成佛なされる時には龍の舌の如き花が咲くと云ふので、「龍華

其徳は高  
野山

の開くまで」とは彌勒菩薩の御下生なされるまでと云ふことである。「忍士」と  
は娑婆世界即ち我等の住めるこの世界のことである。つまり彌勒佛の御出世ま  
での間此の娑婆世界の哀なる衆生を救はんがために、お護り下さるのが弘法大師  
遍照金剛尊のお誓願であること示されたのである。

『論語』に「之を仰げ彌々高く之を鑽れば彌々堅し」と云ふ語がある、是れは孔  
子の人格に觸れたる門人がその師の人格の偉大にして測る可からざることを歎  
じたのである。「仰げばいよ／＼高野山」とは語を『論語』から取りて大師の徳  
の廣大なることを讃し兼ねては高野山が尊き靈地であることを顯すのである。  
「雲の上人」とは天皇とか皇族のお方である、人民は地上の人間であるが兼好法  
師の『徒然草』にも「竹の園生にいたるまで人間のたねならぬぞやんごとなき」  
と云ふ通り、皇族は總て天津神の御裔であると云ふ邊から雲の上人と云ふのであ  
る。「賤の男」とは名も位もなき身分の低い人々である男に限るのではないけれ  
ど和讃は語に制限があるから賤の男と云ふ中に賤の女も含まれたのである。  
「結ぶ縁の蔦かつら縋りて登る嬉しさよ」とは譬へば獨立では壹尺の高さにも

我等は葛

弘法大師和讃

立つことのできない葛蔓が松の樹に縋りつけば數十丈の高さにも登り得るが如く、上は雲の上人の皇族より下は我々鄙賤の者に至るまで、獨りだちでは諸善萬行を修し、十信十住等の五十二位を越えて、佛果の位に登るなどは到底できさうにないけれども、大師に御縁を結んだれば、恰も葛蔓が松に縋りて高きに登るやうに、仰げばいよ／＼高き大師の御徳に縋りて、佛果の高きにまで登ることができ、何と嬉しいことよと云ふのである。尙ほ兼ねては、王侯士大夫庶人に至るまで、葛蔓の如く大師に結縁せんがために、高野山に參詣するが參詣する者に取りては、尊き大師にお縋りするのであるから、いとも嬉しいことであるとの意である。高貴のお方で、大師に御歸依なされた例は、大師御在世の平城帝、嵯峨帝、淳和帝、仁明帝を始め、御入定後では、宇多帝、醍醐帝、後宇多帝など最も有名である。嵯峨天皇より大師に寄せたまへる詩に

嵯峨天皇  
と大師

閑僧久しく雲中の嶺に住す、

遙かに想ふ深山は春尙ほ寒からんと、

料り知る松柏甚だ静黙ならんと、

煙霞解せず幾年か冷する、

禪關は近日消息断わたり、

京邑はいま花柳寛なり、

菩薩嫌ふこと莫れ此の輕き贈ものを、

爲に施者の世間の難を救へ。

と云ひ、淳和太上皇の弔書に

淳和天皇  
と大師

眞言の洪匠密教の宗師、邦家其の護持に憑り、動植其の攝念を荷ふ。豈に圖らん

や、屹屹未だ迫らざるに、無常遽かに侵さんとば。仁舟棹を廢し、弱喪歸を失ふ、嗟

呼哀しい哉。

と云へるが如き、叙慮の如何に深きかを推察し奉ることができる。此の外にも多

くあるけれども、一一之を擧げることにはできぬ。次に高貴のお身を以て高野山に

御參詣なされたのは、白河天皇、鳥羽上皇、後白河上皇、後鳥羽上皇を始め、親王の御登

山、御住山など甚だ多く、宰相公卿などの歸依して、或は經を納め、或は莊園を施入す

る等は、數へ盡すことは六ヶしい程である。斯の如く貴きも賤しきも、總て大師の

高貴の高  
野詣で

廣大なる御徳にお籠りして、現當二世の加護を被つて居るから、それを「雲の上人  
賤の男も」等の三句で讃したのである。

### 第二十八章 甘露の雨

昔國中大旱魃

野山の草木皆枯れぬ

其の時大師勅を受け

神泉苑に雨請し

甘露の雨を降らししては

五穀の種を結ばしめ

國の患を除きたる

功は今にかくれなし

大旱の喜

淳和天皇の天長元年(神武天皇紀元一千四百八十四年)に大旱魃があつて、田畑の農作物は云ふまでもなく、野の草も山の木も皆枯れ果てんばかりであつた。天皇は太く宸襟を惱ませたまひ、大師に勅命して、請雨の法を修せしめられた。そこで大師は實惠大徳を始め、眞雅、眞濟、眞紹、眞堅、眞曉、眞然等の上足のお弟子達を率ひ、神泉苑の池の畔に壇を建て、供養物を整へて、「大雲輪請雨經」の法を修行せられた。

少僧都を

が、靈驗空しからず、結願の日に至りて、池の中に善如龍王が現れ、蒼空に黒雲漲り、雷電轟き閃きて、三日間に亘りて大雨降り注ぎ、昨年来旱魃で困つて居たのが、茲に人民も草木も始めて蘇生の思をなすを得た。天皇は早速藤原眞繩を勅使として、御幣その他種々の物を以て龍王に供養し、又大師の功を賞して、少僧都に任じた。また律師を経ずして、最初から少僧都に任せられるのは、これまでに例のないことである。然し大師は斯の如き世間の名利を心に掛けてござるお方でないから、固く御辭退なされた。「私は此の年齢になるまで、山林や閑地に於て、禪定を修し、佛を禮拜するを以て務として居たから、世間のことに慣れない多くの僧侶に交る可き僧都の職などは不適任である。矢張り一室に閉ぢ籠りて香を焼き、佛を念じ、心を法門に注いで、花を供へ、經を講するなどして、それで國家に對する御恩報謝をさせて頂きたい」との意味の表を奉つたけれども、遂にお許しがなかつたのである。

神泉苑

神泉苑は桓武天皇が都を京都に奠められた時に創設なされたので、南北は二條と三條との間で、四丁、東西は大宮と壬生との間で、二丁の廣さに亘り、乾臨閣その他多くの殿閣を建て、林泉を築き、世々の天皇の御遊覽所とせられてあつた。是れ宮

中は狹隘でもあり、御政務や何かで御窮屈でもあるから、四季時折に此の神泉苑に御幸して、林間に鷹を放ち、池中に釣を垂れなどして、お慰みあそばすことになされて居たのである。大師が此の苑で請雨なされた因縁で、その後早魃毎に眞言宗に勅して、此處で請雨することになつた。後世幾度か興廢はあつたが、終に東寺に賜はつて寺となし、現に京都市上京區御池通大宮西入る處に、矢張り神泉苑の名義で寺として存してある。

守敏僧都に就て

此の時の請雨に就て、大師が守敏僧都と法力の競争をしたと言ひ傳へられて居る。即ち守敏僧都が先づ祈禱をしたら、雨が降つたので、遠近に使を派して調査した所が、雨は浴中にのみ降つて、其の他には及んでなかつた。次に大師に勅して祈禱したら、結願になつても降らない、大師は恠みて定に入つて觀る。守敏僧都が諸の龍王を水瓶の中に封じ籠めて居た。そこで大師は二日の日延べを請ひて、天竺無熱池の善如龍王を招いて祈つたら、果して雨が降つた。朝廷には使を派して調べた所、浴中浴外諸國に降つて居たと云ふのである。是に就て予は疑をもつて居る。守敏と云ふ人があつたかどうかが既に問題で

大師の祈禱

ある、假に此の人が存在したとしても、法力の競争したと云ふとが容易に信せられぬ。國中が早魃で困つて居るのに、自己の名利のために、龍王を封じ籠めて、大師の請雨法を妨げるなどの事がある筈がない。若し斯程までに名利心が強くて、國民の福を妨げることを意に介せぬ者であれば、龍王を封じ籠めるなどの勝れた法力のある筈がない。故に予は請雨に就て、法力の競争したと云ふ傳説を疑ふのである。更に甚だしいのは、大師と守敏僧都とが互に調伏の法即ち抑壓の祈禱を修した、大師が守敏に祈り殺された態を粧ひ、守敏が之を信じて、心驕り氣怠つて居る隙に乗じて、大師が急に祈つたので、守敏は敗れて死んだと言ふ説がある。實に噴飯に値する俗説であつて、眞面目に辯明する價値もない。佛の大慈悲を少しにても聽き、大師の徳の一端をも承はつた程の者は、斯かる俗説に耳を傾けないやうにせなければならぬ。

大師が國民利福のために國家的の祈禱せられたのは、決して神泉苑の請雨ばかりではなく、前後通じて五十一度である。その他個人的に修法せられたのは、到底計へつくすことはできぬ。中にも嵯峨天皇の御代に天下に疫病が流行し、天皇は病



魔退散のために親ら『般若心經』をお寫しになり、大師がその『心經』を講讀して祈願せられた。その時天皇のお寫しになつた『心經』は、現に嵯峨の大覺寺にありて、代々天皇の勅封になつて居る。近くは大正四年今上陛下御即位式の當時之を開封して、三十日間諸人の拜觀を許し、またもこの如く、今上陛下の勅封を施して、秘藏せられてある。又仁明天皇の承和元年に玉體安穩鎮護國家のために宮中に於て御修法を行はれてより、以來毎年恒例となりて、現今に於ても教王護國寺に於て昔の如くに鄭重に行はれて居る。和讃に「國の患を除きたる功は今にかくなし」と云へるは、神泉苑の請雨に就て述べたものであるけれども、此の請雨ばかりでなく、國の患を除いた御功績の數多いことを記憶せねばならぬ。

第二十九章 四句の偈頌

我が日本の人民に  
金口の眞説四句の偈を

文化の花を咲かせむと  
國字に作るみじか歌

いろはにほへごちりぬるを わかよたれそつねならむ  
うるのおくやまけふこえて あさきゆめみしゑひもせず

文化の母

金口の眞説

大師は祈禱修法によりて國利民福を計られたばかりでなく、我が日本國民を文明の惠澤に浴せしめんため、日本特有の平假名文字を造り、その假名も無意味に並べたのでは記憶し難く、且つ無趣味であるから、釋迦如來のお説きになつた四句の偈をば假名を以て言ひ表すやうになされた。「金口の眞説」とは、如來の御口を金口と云ふのである。諸の金屬中で黄金が最も貴く、且つ色や質が變らぬ如く、佛は人中で最も尊きお方であり、又佛は既に生死を解脱してござるから、煩惱妄想のために變遷せられることはない、依て佛を形容するに「身は真金山の如し」など云ひ、佛の光明は金色であり、佛の御口を金口と名けるのである。「偈」とは梵語の偈陀を略したので、文字數を揃へて唱へ易いやうにしたる、此方の歌の如きものを云ふのである。今「金口の眞説四句の偈を」等と云へるは、『涅槃經』第十三卷に、如來親らお説きなされてある諸行無常等の四句の歌詞を、日本文字で、いろはには

へと等の四句四十七字に列ねて日本風の歌に作られたと云ふのである。  
 『涅槃經』第十三卷に依れば釋迦如來がまだ古い古い過去世の時雪山童子として獨り修行して居られた。その時に「諸行無常是生滅法」と唱へた者がある、何者が唱へたのであらう「諸行は無常なり是れ生滅の法なり」如何にも結構な法門である然し是れだけでは文句が終了して居ないで意味が完結せぬ之を唱へた人を捜して次の句を聞かんものと、その附近を尋ねて見れば、一目見ても身の毛の竦立つばかりの畏しい姿の鬼が居た。雪山童子が思ふに斯かる尊き法門を聞いただけでも心が柔き形貌も整ふ筈である、あの様な醜い畏しい鬼が此の尊き法門を唱へたとも思はれぬ然し此のあたりに人影が見ぬから、或は彼の鬼が唱へたのかも知れぬと。そこで童子は鬼に向ひて先刻の諸行は無常なり是れ生滅の法なりとの偈は貴方が唱へたか、また貴方が唱へたのならば何處で如何なるお方から學んだか、次の句があるだらうから説いて聽かせて貰いたいと問うた。鬼の云ふには成程我れが先刻偈を唱へたが、先日來飢餓に苦んで居るので、次の語を出すことができぬ、我は暖き人肉を食ひ熱き人血を吸はねば飢餓を醫すことができぬと。童子

云ふ、何れ死すれば腐るか禽獸に噉はる可きこの身を以て尊き偈文に易へること  
 ができれば、恰かも瓦器を施して七寶の器を得るが如くである、此の身を施す故に  
 前の續きを説かれよと。そこで鬼は次の句を「生滅滅已寂滅爲樂」と説いた。  
 「生滅が滅し已りて寂滅なるを樂とす」成程尊い教である。童子は此の偈を  
 世の中に弘めるために、山中の石や木の葉などに書きつけておき、次いで約束の通  
 り肉身を供養せんと、高い樹に上りてその上から身を投げた。あはや體は碎け血  
 は迸りて鬼の餌食になるかと思ひの外、鬼は忽ち帝釋天に變じて、童子の體を受け  
 て地上に安置した。此の功德によりて釋迦如來は成佛を十二劫早められた。依  
 つて此の偈を捨身の偈とも涅槃の偈とも成道の偈とも名けるのである。  
 雪山童子が身命に易へて得た所の尊き四句の偈を、兒童走卒にも解るやうに大  
 師が四十七字の短歌にお作り下された。「諸行無常」とはありとあらゆるものは、  
 一定して動かないものとはなく、悉く移り變るものであると云ふ意味で、それは  
 恰かも櫻や菊や美しい色に芳しい香を放つて居るけれども、久しからずして散り  
 果てると同じである、依つて大師は「色は匂へど散りぬるを」と仰せられた。「是

生滅法」は上の如く諸行の無常なるは是れ迷の世界の生れたり滅びたりするものなるが故だと云ふのである。迷の世界に於ては到底生滅を脱れるとはできぬ、決して常住に變らぬと云ふことはあり得ない、依つて之を「我が世誰ぞ常ならむ」と仰せられた。「生滅滅已」とは迷の世界にありてこそ生れるの滅びること云ふこともあるが、此の生滅は迷に因りて存するので、悟の世界に於ては全く生滅はない、生滅の爲作あるを有爲と云ひ、生滅なきを無爲と云ふ、即ち生滅滅已とは有爲の迷の世界を離れて無爲の悟の世界に入ることである、之を大師は「有爲の奥山今日越えて」と仰せられた。「寂滅爲樂」とは寂はシヅカと云ふこと、滅は迷妄煩惱の滅びたこと、即ち寂滅は悟の世界の状態を云ふのである、悟の世界に到れば、生死の夢を見ることも、煩惱の酒に酔ふこともない、極めて安樂である、是れを大師は喩によりて「淺き夢みじ酔ひもせず」と仰せられたのである。

### 第三十章 假字の便益

いかなる無智の稚子も

習ふに易き筆の跡

されども總持の文字なれば

僅かに四十七字にて

思へば萬國天の下

知れば知る程意味深し

百事を通ずる便利をも

御恩を受けざる人もなし

漢字と羅馬字

前には「いろは歌」が極めて意味の深い尊い教法であることを述べたのであるが、今此の八句はそれに引き續いて、いろはの假字文字が大層結構なはたらきのあることを述べるのである。近頃は漢字の字書が複雑で覺え難く、また筆記に不便であり、字數が多いので印刷やタイプライターなどに、不適當だと云ふので、漢字節減論などが随分有力に議論せられ、延いては假名をも廢して羅馬字を採用せよとの説も頗る人氣があるやうである。羅馬字論にも勿論根柢があるけれども、平假名や片假名を用ひることに賛成する人も多いやうである。殊に平假名の字形は優美で、また日本の言語にも好く適合して居るから、之を全く廢することは容易でなからう。而して字書や字數の少くて覺え易く書き易いことは、決して羅馬字に劣らぬ。和讃に「いかなる無智の稚子も習ふに易き筆の跡」と云へるは、即

佛敎といふは歌

弘法大師和讃

ち是れである。書き易く覺え易き文字であり、簡單なる歌詞であるけれども多くの深い意味を總括したる文字であるから知れば知る程その中の意味を探り出し見れば大變意味が深いのである。例へば此の『いろは歌』が『涅槃經』の四句の偈頌を譯したものだ云へばそれで頗る意味が深いが、その四句の偈頌は涅槃の偈又は成道の偈と云はれるのだから、佛教の本意を遺憾なく言表して居ることも云へるし、佛教の人生觀を餘蘊なく説き盡してあることも云へるのである。されば此の四十七字の歌に八萬四千の法門が悉く含まれて居ることになるのである。

前に述べた通り漢字を廢して假名ばかりにしやうかと云ふ説もある程で、僅かに四十七字知つて居て之を使へば何事に於ても大概の智識を發表し、思想の交換をすることが出来る。凡そ世の中に於て、人によりて造られたもので、文字程偉大なるものはない、電氣でも蒸氣機關でもその他如何に精巧なる器械の發明でも、文字の發明に及ぶものはない。過去一千年の間に我が日本民族が此の文字によりて如何に文化の程度を高めたか、また一千年の間に積み重ねたる文明の力によりて、今日世界人類に如何程の影響を與へたるか、斯く觀來れば、世界萬國大師の御恩

を受けぬ者はないとも云へる。

いま大師が文字の力によりて、日本の文明進歩をお助けなされたことを述べたから、勢ひ文學と教育との上に於ける大師の御功績を窺はねばならぬ。大師が詩文に勝れて居られたことは今更述べるまでもない、然しあまり人の知らないことで、大師の御著述なされた『文鏡秘府論』六卷に就ては是非一言する必要がある。同書は詩文の作法を論述したもので、斯の種の書は日本では全く類がない、支那に於ては當時此の『秘府論』の典據になつた文章論が數種あつただけれども、現今では全く廢れて傳はつて居ない、だから當時の詩文論を研究するには、此の書を見るより外はないのである。斯く他の書が廢れて此の書のみが傳はつて居るのは、傳はり存す可き價値があるからで、此の書が古今獨歩の名著であることがわかるのである。

次に我國の教育史上に於ては何と云うても綜藝種智院を第一にあげねばならぬ。大師の當時には官立の學校があつて、少數の人を教育しただけで、庶民平等に教育を受けることはできなかつた。然るに大師は天長五年(紀元一千四百八十八

年御年五十五歳の時綜藝種智院と稱する學校を建て貴賤を問はず萬民平等に入學することを許し學科は佛教と漢學と何れも好みに應じて學び得るやうにした。是れは當代獨特の私立大學であつたのである。尤も當時藤原氏の勘學院在原氏の辨學院恒貞親王の淳和院橋氏の學館院和氣氏の弘文院など私立學校があることはあつたけれど此れ等はみなその氏族の子弟のみを入學せしめて各我一族の榮達を計る爲のものであつた。故に學生に於ても學科に於ても極めて窮屈なる制限があつたので綜藝種智院の如く包括的の學校は實に當代獨特である。當に當代獨特と云はんよりは大師以後明治に至るまで一千年間全く比類がなかつたと云うて差支がない。是れ等は大師の御功績の一端であるが世界の文明史上に於ける位置の如何に高大なるかを知らることが出来るであらう。

### 第三十一章 世間の利益

猶も誓のその中に

五穀豐熟富み貴き

家運長久智慧愛敬  
殊に見る目も淺ましき  
八十八の遺跡に

息災延命且易産  
業病難病受けし身は  
よせて利益をなしたまふ

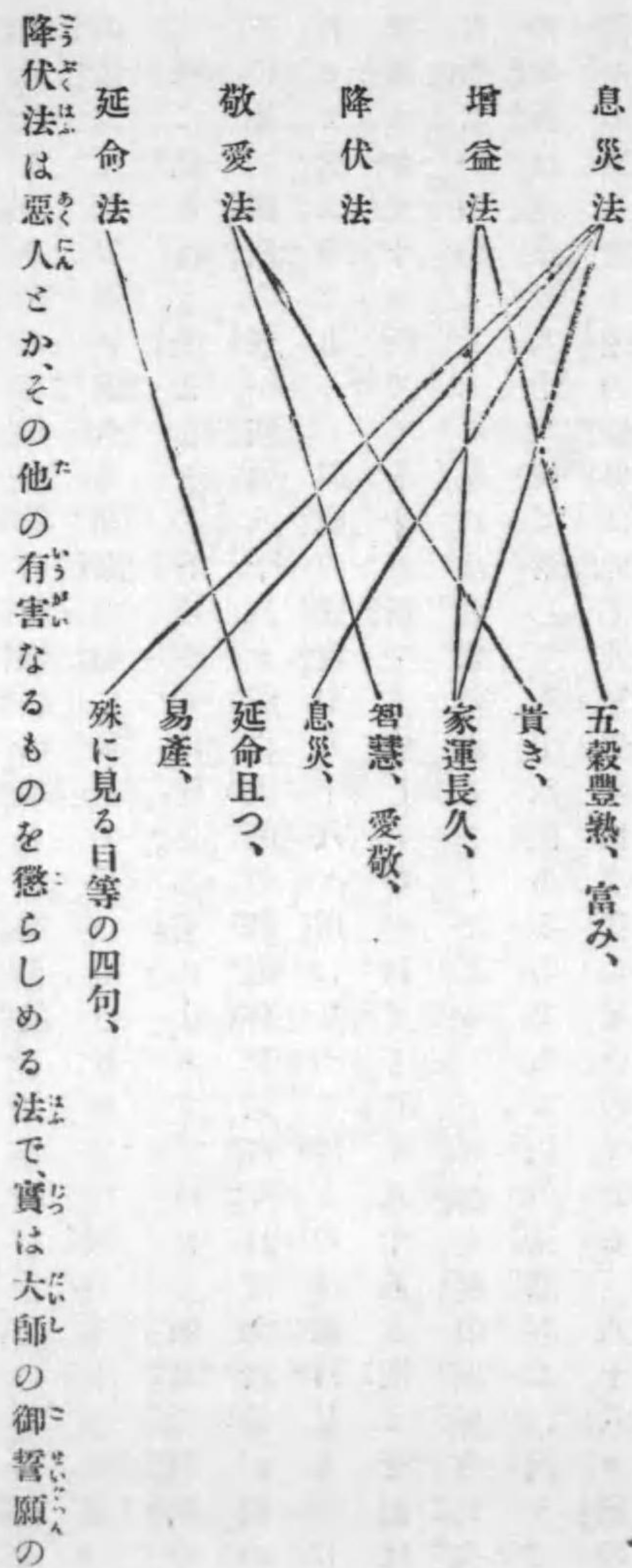
尊き現世利益

扱初の四句は汎く世間の利益を挙げ後の四句は現世利益の中にも特に業病難病の者まで御利益を下さることを歎するのである。佛法の本意は煩惱を離れて佛果を證するためであるから現世の利益などは如何でもよい斯の如く現世の御利益を得させやうと教へたり又之を得んことを祈願したりするは却つて佛法の本意に背くものとして排斥する者などもあるけれど世法にも「衣食足りて禮節を知り倉廩充ちて榮辱を知る」と云ふことがあり佛法にも業に因りて苦を受け、苦に因りて惑を起し業を造ると云ふ通りあまり苦しくは正道に入り得ない物質にも精神にも生活に適當の餘裕がなくは法を聴くことも道を學ぶこともできないのであるからそれを大師が愍みたまひて世間の御利益までもお誓ひなされたのである。また御利益を受ける吾々から云うても禍を厭ひ福を欣ぶは人情

の常で、如來又は大師の御力によりて禍を攘ひ福を招けば、それを縁として一層正法に近づくことになり、或は此の得たる福によりて、更に大なる功德を積むべき資糧とするところもある。斯の如く吾々の人情の弱點をお察し下されて、それ相應の御利益を下さる大師こそ、實に我等の親様である。吾々の人情をも察せずして、現世のことに意をかけるな、世間の利益を祈るなど云はれては、我等の御親としては、よそ／＼しく感ずるであらう。

和讃に「猶も誓のその中に」等とあるが、五穀豊熟富貴家運長久智慧愛敬息災延命安産などの御利益を得させることを、如何なるお詞でお誓ひなされてあるかと云ふに、大師の御誓願とて別に一卷の書物になつて居るわけではなく、御撰述の御書物の中からその意味を取つたのである。更に他の方面から窺ふに、大師が心血を盡いでお傳へになり、腦漿を絞りてお弘めになつたのは、申すまでもなく真言密教である。真言密教は大師の至精神である。その真言密教の中に三種法四種法五種法と云ふのがある。三種法とは息災法増益法降伏法であつて、息災は佛部の本誓増益は蓮華部の本誓降伏は金剛部の本誓である。而も一切の佛菩薩明

王等は此の三部の外はないから、此の三種法は一切諸尊の本誓である。増益は意味が廣いから、その中から敬愛を開いて四種法とし、息災から更に延命を開いて五種法とするのである。此等の三種法四種法五種法に就ては、頗る深い意義があるから、大層込み入つた説明を要するのであるけれど、此の小冊子で説くことはできないから、略する。今且らく和讃の文を五種法にあて、見れば



中にある筈であるが然し此の降伏法は誤りて罪を造ることがあり易いから常人の用ふ可きでない依つて和讃の中に擧げてないのである。

八十八ヶ所

「殊に見る目も淺ましき」等の四句は前生の業によりて受けたる所謂天刑病や、その他の難病の者が四國八十八ヶ所の大師の御遺跡を巡拜すれば御利益が頂かれると云ふのである。四國の靈場が八十八ヶ所になつて居るのは如何なるわけであるか九ヶ所でも七十ヶ所でも宜しいかそれとも必ず八十八ヶ所とせねばならないのかと云ふに是れは意味のあることである。三界即ち迷の世界の凡夫の煩惱は見惑の八十八使と稱して八十八種あるのである此の見惑あるに因りて種々の業を造り迷の世界に於て苦を受けねばならないのである。八十八ヶ所の靈場は此の八十八の煩惱を斷つ意味である。煩惱が原因となりて苦を受けて居るのだから八十八ヶ所の靈場を巡拜して苦の本を根絶やしすれば苦を脱れるのは當然である。業病難病の者が靈場巡拜によりて病氣平癒したとか盲人の目が明いたとか聾者の耳が通じたとか雙の足が立つたとか云ふことは四國の靈場に於て往々あることである。又假令斯く觀面に全治せなくとも精神に慰安を得る

ことによりて御利益を得て居る。是れは今云へる如く煩惱を斷つからその結果たる苦を脱れるのである。然し思うて見れば我等は八十八の煩惱どころか通常の修行では唯だ一つの煩惱すらも斷つことのできない身分である。然るに靈場を巡拜することによりて斯く大なる功德のあるのも大師の御力である決して我等の足に任せて巡つた功ではない。

第三十二章 出世間の救濟

悪業深きわれくは 繋がぬ沖の捨小舟  
生死の苦海果もなし 誰を便の綱手繩  
爰に三地の菩薩あり 弘誓の船に櫓械取り  
濟けたまへる御慈悲の 不思議は世々に新なり

凡夫の有様をば「日夕に營營として衣食の獄に繋かれ遠近に趁り逐うて名利の奔に陥つ」とか、「十悪は心に快くして日夜に造り六度布施持

戒忍辱精進禪定及び智慧の六種は迷の世界より悟の世界に度るべき法であるから六度と云ふは耳に逆ひて心に入らず人を誘り法を誘りて焼種の罪(佛)となるべき種までも悉く焼き盡すと云ふやうな重き罪の(こ)を願みず」と嘆かせられてある。洵に自ら省みれば我がことは悪いことがあつても之を寛して少しの善いことでも人に誇らんとし他人のことは善い事にまで難僻をつけて悪いことは厳しく責める。偶々善い事をなせば其は名聞利養の爲の偽善であつたりつまり身には殺生偷盜邪淫口には妄語綺語惡口兩舌心には慳貪瞋恚愚痴と云ふ風に日々にする事なす事概ね悪い事ばかり。斯の如く惡業深き我々は「西方阿彌陀如來の淨土へ行かうにも舵の取りやうがわからず東方藥師如來の瑠璃光世界へ行かうにも風向の都合が悪いその外何れへ行くにしても潮時が悪いとか櫓を漕ぐ力が弱いとか到底思ふに任せぬ有様は恰かも「繫がぬ沖の拾小舟」の如くである。その沖も瀬戸内海や高々日本海の如き海ならば何處かに漂ひ着く時もあるうけれど「生死の苦海果もなし」で生れては死に生れては死にする此の迷の世界は、大師が「生れゆき生れゆきて六趣に輪廻し死に去り死に去りて三途に沈淪す」

生死の海

と仰せられたる如く實に果てしもなく生死の反復である。斯かる生死の苦海に於ては誰を便りにする由もない如來は「妻子も珍寶も及び王位すらも命終に臨める時には隨はざる者なり」と説かれてある。「地獄の沙汰も金次第」とは人生に於ける金の力を皮肉に云うたもので決して金や腕力や名譽でもつて生死を解脱する資糧にはならない然らば此の生死の苦海に於ては「誰を便の綱手繩」とすれば宜しいか。

三地の苦

菩薩の中にも未だ眞實の智慧の開けない凡位の菩薩と既に眞實の智慧の開けたる聖位の菩薩とある聖位の菩薩と云ふ中に初地から第十地まで十位階に分れてある第三階の菩薩を三地の菩薩と云ふのである。弘法大師が入唐せられて御師惠果和尚から眞言密教をお受けなされたがその當時支那人から「今大日本國の沙門あり來りて聖教を求む皆學ぶ所をして瀉瓶の如くなる可し。此の沙門は是れ凡徒に非ず三地の菩薩なり内には大乘の心を具し外には小國沙門の相を示す」と褒められた。されば和讃に「爰に三地の菩薩あり」と云へるは弘法大師を指したので便るべきなき我等は誰を頼まう爰に第三地の菩薩弘法大師がおはし

二佛中間の導師



て釋迦如來に後れ彌勒菩薩に先立ちたるその中間の衆生を殘らず御濟ひ下さるのである。これを古歌に「日はしづみ月はまだ出ぬたそがれにかゝけて照す法のごもし火」とよまれてある。それで大師の御誓願に「虚空盡き衆生盡き涅槃盡きなば我が願も盡きなん」と仰せられてある。是れほど廣大なる願はない、弘誓の船に櫓棹ごり」とは即ち是れである。虚空盡き衆生盡き涅槃盡きまで衆生濟度のためにお努めあそばさす云ふ此の御誓願の意をある人の歌に、「生き死にの河に世を經て渡し守渡しはてすば棹もおさめじ」と詠まれてある。誠にありがたいことには輕重を問はずして苦を抜き親疎を論せずして樂を與へ給はるので、「濟け給へる御慈悲の不思議は世々に新なり」お濟ひ下さるお慈悲は昔も今もかわりはない。その靈驗は何時何處に於ても常に顯著なのである。我等は果てしも知れぬ生死の苦海に於て斯かる尊き弘誓に遇ひ奉ることを得たるを喜び益々信心歸依せねばならぬ。

第三十三章 唱名禮

南無大師遍照尊  
南無大師遍照尊

南無大師遍照尊

大師遍照尊

「眞言安心和讃」も「光明眞言和讃」も此の「弘法大師和讃」も最後に「南無大師遍照尊」を三遍繰り返して唱へることになつてある。遍照とは前に述べたやうに大日如來のお名であり、それを弘法大師御灌頂の時に金剛號としてお受けなされた。大師と云ふのも實は如來に名ける語である。如來は一切衆生を教へ導くお方であるから大なる教師と云ふ意味で大師と名けるのである。それが名僧高德は世の人を最も善く教へ導くから斯かる名僧を大師と名けるに至つたのである。南無は梵語であつて歸命と翻譯する。されば「南無大師遍照尊」と云へば大日如來に歸命する意味にもなるし、弘法大師に歸命する意味にもなる。大日如來は此の眞言密教の教主であり弘法大師は眞言密教をお傳へ下された祖師であるから何れも歸命し頂禮せねばならぬ。然し分けて云へば「安心和讃」と「光明眞言和讃」とは眞言の法門に就ての和讃であるからその法門の教主大日如

報恩謝徳

弘法大師和讃

來に歸命し、「弘法大師和讃」は特に法門をお傳へ下されたる祖師の徳に就ての  
 和讃であるから高祖弘法大師に歸依するがよい。即ち斯く和讃の最後に御名を  
 唱へて歸命し頂禮するは報恩の念を以て感謝する意である。

### 三 和 讚 講 義 畢

在家勤行三和讚 眞言諸陀羅尼 光明眞言袖鏡 四國靈場和讚 眞言諸經要集 同 三時勤行小形 同 諸經常用集 理趣經 カナ付 同 大 形 同 法 要 入 引導作法二卷書 聲明集(古義) 同 聲明集(新義) 法 則 集 地 藏 講 法 則 過 去 帳 土 砂 加 持 法 則 四 座 講 法 則	大般若法則 諸 說 草 冬 報 講 恩 如 來 壽 量 品 兩 部 讚 草 紙 施 餓 鬼 法 大 毘 盧 遮 那 經 金 剛 壽 命 經 同 カナ付 光 明 眞 言 品 褒 瀧 陀 儀 則 般 若 心 經 秘 鍵 同 カナ付 神 祇 講 式 三 陀 羅 尼 大 荒 神 經 大 師 和 讚 仁 王 經 舊 譯	同 新 譯 摩 多 體 文 大 佛 頂 陀 羅 尼 大 隨 求 陀 羅 尼 普 通 眞 言 藏 遺 教 經 同 和 訓 五 部 秘 經 眞 言 論 題 安 宅 神 呪 經 大 般 若 理 趣 分 同 カナ付 同 二 枚 合 上 等 法 華 經 同 カナ付 同 要 品 カナ付 自 我 偈 三 部 經 カナ付	阿 彌 陀 經 血 盆 經 淨 土 日 用 勤 行 式 大 雲 點 三 部 經 時 宗 勤 行 式 金 剛 般 若 經 藥 師 經 地 藏 本 願 經 延 命 地 藏 經 辨 財 天 經 毘 沙 門 天 經 同 功 德 經 歡 喜 天 使 呪 法 經 不 動 陀 羅 尼 經 同 カナ付 同 觀 音 經 大 字 同 觀 音 經 細 字 同 諸 陀 羅 尼 入	同 訓 白 衣 觀 音 經 十 一 面 觀 音 經 大 黑 天 經 神 變 善 薩 報 恩 式 文 殊 經 烏 樞 瑟 摩 經 西 院 川 原 地 藏 和 讚 般 若 心 經 同 訓 讀 同 西 國 御 詠 歌 同 緣 起 略 同 和 讚 付 同 五 百 題 付 同 四 國 詠 歌 同 山 關 大 師 廿 五 靈 場 詠 歌
---	--	--	--	---

秘經合刻諸經全集	神道大積	同十部積	十三佛由來	弘法大師御一代記	同讚義	同行狀記	役行者傳記	理源大師傳記	觀音靈場記	修驗摘要記	いろはかるた新釋	三陀羅尼和解	紀念法話	人となる道	理趣經和解	真言功德述讚
十住心義林	教示章講義	付法傳	釋門小字典	地獄實有說	密教研究索引	永代過去帳	役行者利生記	阿字觀禪策	四國靈驗記	同誘道記	安心小鏡	在家勤行和解	安心往生集	引導諷誦記	引導便蒙	呪咀調法記
科註心經秘鍵	二教論裨蒙	文鏡秘府論	梵文四十九院抄	四十九院抄	悉曇字記捷覽	悉曇曇	和語連聲	梵漢阿彌陀經	梵語千字文	種子真言集	心經異譯	大師筆心經	舍利供養式抄	珠數功德經	光明真言金壺集	好夢拾因
印いろは天理抄	初學暗誦文	宿曜經	明惠上人傳記	行基行狀記	孝養集	結網集	魚座講式	四座講式	大日經六卷鈔	三教指歸	同解知鈔	同カナ付	窈誓傳	秘藏記	性靈集大本	同カナ付
同中本	十卷章	冠導作持門	教誠律儀首書	同指要鈔	冠導真言名目	衣鉢名義章	有部律清規	顯密威儀	西國道中記	佛法双六	三世の光	一休物語圖會	釋迦一代傳記			

大正十年三月十五日 印刷  
 大正十年三月二十日 發行



山城屋

著作者 ミ ト ラ 會  
 右代表者 吉 祥 眞 雄  
 發行兼印刷者 藤 井 佐 兵 衛

書籍 經類 販賣所

京都寺町通五條上ル  
 山城屋 藤井佐兵衛

電話下五八五番  
 振替口座 大阪三一五一番  
 東京四五九五番

醍醐三寶院流

●不動尊護摩供次第

●新版九字護身法 印圖入

●新版二十八宿日割鑑 七曜入

●諸國靈場詠歌五百題 平かな付

●佛教和讚五百題 平かな付

●觀音經諸陀羅尼入 平かな付

●林田光禪著眞言宗綱要

●吉祥真雄著般若心經秘鍵講義

吉祥真雄著

●般若心經講義

●元三大師御闡

●同札紙一千枚

●三十二番御闡札紙

●慈雲尊者通俗諷誦弔祭文

●十善法語

●小野藤太著眞言哲學

●密宗安心教示章

324  
659

終